

### 教員恩給

○法律第九十號 (明治二十三年十月二日)

市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

第一條 市町村立小學校ノ正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

一 年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ

二 傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

三 廢校ニ依リ退職又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第三條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

一 職務ニ依リ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第四條 官吏恩給法第五條第二項第四項五項第六條第十一條及第十二條第三項ハ退隱料ニ適用ス

退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退隱料ノ支給ヲ停止ス

一 公務ニ就キ退職現時ノ給料額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二 五箇年以上受領ヲ怠リタルトキ

三 公權ヲ停止セラレタルトキ

第六條 年齡末タ六十歳ニ至ラヌシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第七條 市町村立小學校ノ准教員ハ職務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第三條ニ該當スルモノニ限リ退職現時ノ給料四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第八條 在職滿一年以上ニシテ退職シタル市町村立小學校正教員ニハ退職現時ノ給料半ク月分ヲ以テ在職年數ノ一ケ年ニ當テ其年數ニ應スル金員ヲ一時給與ス但休職滿期ニ依リ退職シタル者ハ其本職最終ノ給料額ニ依リ之ヲ給與ス

第九條 第三條又ハ第七條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ前項ノ限ニ在ラス

本條ノ退職給與金ヲ受ケタルモノ他日市町村立小學校正教員ニ再任シ爾後退職シタルトキハ第一項ノ在職年數ハ其再任ノ日ヨリ起算ス

第九條 退職料ノ支給及第八條ノ給與ハ市町村長ノ証明ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス  
官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退職料ニ適用ス

第十條 市町村立小學校正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ  
二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ  
三 退職料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十一條 官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十三條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ廢疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹又ハ之ヲ給與スルモノナキ場合ニ適用ス

第十二條 在職十五年未滿ノ市町村立小學校正教員在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職三年未滿ノモノニ在テハ本職最終ノ給料一箇年分ニ當ル金員ヲ給シ二年以後滿一年毎ニ給料年額百分ノ二ニ當ル金員ヲ加フ  
第十三條 扶助料及扶助金ノ支給並第十一條第二項ノ給與ハ市町村長ノ申牒ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス  
第十四條 府縣ハ小學校教員恩給基金ヲ備フヘキモノトス  
市町村ハ其市町村立小學校ニ在職スル正教員ノ給料額百分ノ一二當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス  
兼職ニ係ル加俸ニ對シテハ本條ノ納金ヲ要セス  
本條第二項ノ納金ハ府縣小學校教員恩給基金ト爲スヘシ恩給基金ハ其利子ヲ以テ退職料扶助料扶助金第十一條第二項ノ給與ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得サルモノトス  
本條第二項ニ據リ各府縣ニ於テ收入シタル納金額二分ノ一ニ當ル金員ヲ收入年度ノ翌々年度毎ニ國庫ヨリ府縣ニ給與スルモノトス  
退職料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ハ恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘキモノトス

恩給基金ノ管理並退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ  
關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

恩給基金ノ管理並退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ  
關スル費用ハ總テ府縣ノ負擔トス

第十五條 此法律中第一條乃至第十三條ハ明治二十六年度ヨリ第十四條ハ明治二十  
五年度ヨリ之ヲ施行ス

第十六條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ  
特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則

第十七條 此ノ法律ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○文部省令第二號 (明治廿五年二月十日)

明治二十三年(十月)法律第九十號市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助法第十四條  
ニ基キ市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給規則

第一章 退隱料ノ請求

第一條 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第二條第三條第四條第七條ニ依

リ退隱料ヲ受クヘキ者ハ退隱料請求書ヲ作り退職ノ際勤務セシ小學校所屬市町村  
長ニ差出スヘシ

第二條 退隱料請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一 在職中ノ履歷書

二 戶籍吏ノ作リタル戶籍謄本但市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第七  
條ニ掲ケタル者ハ之ヲ要セス

第三條 職務ニ依リ痲傷ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ退隱料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲ク  
ル書類ノ外尙左ノ書類ヲ添付スヘシ官吏恩給法第六條ヲ適用スヘキ者亦同シ

一 現認證書若クハ事實ヲ證スル公文ノ寫又ハ口供書

二 醫師ノ診斷書

第四條 退隱料請求書ヲ受ケタル市町村長ハ事實ヲ取調請求ノ理由アリト認ムルト  
キハ之ヲ證明シ證據書類ヲ添ヘ府縣知事ニ差出スヘシ

市町村長ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シ之ヲ府縣知事ニ差出ス  
ヘシ

第五條 府縣知事ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ退隱料證書ヲ作り之ヲ本人  
ニ交付スヘシ但退隱料増加ノ爲更ニ退隱料證書ヲ交付スルトキハ前ニ交付シタル

證書ヲ返納セシムヘシ  
第六條 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第八條第一項ニ依リ給與金ヲ受クヘキ者ハ給與金請求書ヲ作り在職中ノ履歷書ヲ添ヘ退職ノ際勤務セシ小學校所屬市町村長ニ差出スヘシ市町村長ハ事實ヲ取調證據書類ヲ添ヘ府縣知事ニ差出スヘシ

府縣知事ニ於テ前項ノ請求ヲ許可シタルトキハ辭令書ヲ作り之ヲ本人ニ交付スヘシ

第二章 扶助料ノ請求

第七條 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十條第十一條第一項第十二條ニ依リ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者ハ扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ作り親族二名親族ナキハ近隣ノ戸主二名連署シ退隱料ヲ受ケヌシテ死去シタル者ノ遺族ニ在リテハ死者ノ最終勤務セシ小學校所屬市町村長ニ退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族又ハ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ニ在テハ居住地ノ市町村長ニ差出スヘシ市町村長ハ其所屬市町村立小學校正教員遺族ノ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者アルトキハ扶助料又ハ扶助金ノ請求上必要ナル書類ヲ遺族ニ交付スヘシ

第八條 扶助料請求書又ハ扶助金請求書ニハ戸籍吏ノ作リタル戸籍謄本及左ノ書類

ヲ添付スヘシ

- 一 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十條第一第二第十二條ニ當ル者ノ請求書ニハ市町村長ヨリ交付シタル死者ノ履歷書
- 二 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十條第三ニ當ル者ノ請求書ニハ死者ノ退隱料證書
- 三 官吏遺族扶助法第四條第二項ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ傷痍若クハ疾病ノ職務ニ起因シタル證據書類醫師ヲシテ診察セシメタルトキハ其診斷書及退隱料ヲ受ケヌシテ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第二ノ書類
- 四 扶助料ヲ受クル者死去シ又ハ權利消滅シタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ扶助料證書
- 五 公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ確定裁判ノ宣告書寫
- 六 官吏遺族扶助法第十五條ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ其事由ヲ詳記シタル書類醫師ノ診斷書及退隱料ヲ受ケヌシテ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第一ノ書類公務ニ起因

スル傷痍若クハ疾病ニ依リ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第三ノ書類扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ孤兒ニ在テハ本條第四ノ書類

第九條 扶助料請求書又ハ扶助料請求書ヲ受ケタル市町村長ハ事實ヲ取調證據書類ヲ添ヘ扶助料又ハ扶助金ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ差出スヘシ

第十條 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十一條第二項ニ掲ケタル給與金ノ請求等ハ扶助金ノ例ニ依ルヘシ但癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ノ請求書ニハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第三章 退隱料扶助料ノ支給及停止

第十一條 退隱料支給ノ期ハ退職ノ翌月ヨリ始マリ死去ノ月ヲ以テ終ルモノトス退隱料及扶助料ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ支給スヘシ但權利消滅ノトキ及給與金扶助金ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給スヘシ

第十二條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ証明スヘシ

第十三條 退隱料ヲ受クヘキ權利消滅シ若クハ停止セラルヘキ者ノ支給ノ終始ハ左

ノ各項ニ依ルヘシ

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日々本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 公務ニ就キ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキハ其給料ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ停メ其給料ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

三 五箇年以上受領ヲ怠リタルトキハ其受領ヲ怠リタル支給期月ノ翌月ヨリ起算シ其一期ノ支給ヲ廢ス

四 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラレタルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

第十四條 扶助料支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルベシ

一 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給

ヲ復ス

三 公權停止中轉給ヲ受クヘキ者ノ支給ハ本人停止ノ翌日ヲ以テ始メ復給ノ前日ヲ以テ終ル

第十五條 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第三條ニ掲ケタル増加退隱料ノ等差ハ左ノ如シ

第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七

第二項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ六

第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年太政官達第十六號文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第十六條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者他ノ市町村ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ轉籍若クハ寄留シタル地ノ市町村長ヲ經テ府縣知事ニ届出ヘシ

他ノ府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ轉籍若クハ寄留シタル地ノ市町村長ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ届出ヘシ

退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ハ每期支給スヘキ退隱料又ハ扶助料ヲ轉籍若クハ寄留シタル地ノ府縣知事ニ送付シ其支給方ヲ委託スヘシ

前項ノ委託ヲ受ケタル府縣知事ハ之ヲ本人ニ交付シ其領收證書ヲ徴シテ委託ノ府縣知事ニ送付スヘシ

第十七條 退隱料ハ扶助料ヲ受ケタル者死去シ若クハ權利消滅シ又ハ公權ヲ停止セラレタルトキハ本籍市町村長ヨリ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ報告スヘシ

第十八條 退隱料ヲ受クル者公務ニ就キタルトキハ其所屬主長ヨリ退隱料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ報告スヘシ解職シタルトキ亦同シ其有給者ニ係ル報告書ニハ給料額及給料ノ支給ヲ始ムル日解職ノトキハ支給ヲ終リタル日ヲ付記スヘシ給料額ニ増減ヲ生シタルトキハ其時々之ヲ報告スヘシ

第十九條 第十七條ノ場合ニ於テ扶助料ヲ受クヘキ者又ハ其轉給ヲ受クヘキ者ナキトキ又ハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失ヒ若クハ扶助料ノ支給ヲ廢スヘキ者ニ係ルトキハ本籍市町村長ハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ收メテ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ送付スヘシ

本人他ノ市町村ニ居住セル場合ニ於テハ該市町村長ニ委託シテ之ヲ收ムルコトヲ

得

第四章 雜則

第二十條 府縣知事ハ第五條又ハ第九條ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ本人ニ交付スルト同時ニ之ヲ其本籍市町村長ニ通知スヘシ

第二十一條 水火災盜難等ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ失亡シタル者ハ居住地ノ市町村長ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ届出ヘシ

府縣知事ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ヲ作り之ヲ交付スヘシ  
前項退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ト同一ノ効力アルモノトス

第二十二條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ添ヘ居住地ノ市町村長ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ届出ツヘシ府縣知事ハ證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ署名捺印シテ之ヲ本人ニ交付スヘシ

第二十三條 此規則ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道ニ於テハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市町村長ノ職務ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ島司郡區長戸長又ハ之ニ準スベキ者之ヲ行フヘシ

勅令第十八號 (明治廿五年二月八日)

朕市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數算定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル正教員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算メ退職ノ月ヲ以テ終リトス

第二條 左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ニ算入スヘシ

一 市町村立小學校正教員休職中ノ年數及月數

二 明治十四年六月以後市町村立小學校訓導ノ職ニ在リタル年數及月數

第三條 左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ヨリ除算スヘシ

一 自己ノ便宜ニ依リ退職シタルモノ又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタルモノ再就職シタルトキハ其在職ノ年數及月數

二 恩給若クハ退隱料ヲ受クヘキ職ニアル者ニシテ市町村立小學校正教員ヲ兼ヌルトキハ其兼職中ノ年數及月數

文部省令第三號 (明治二十七年二月十日)

市町村立小學校廢止ノ際其小學校教員ノ職ニ在ル者即日他ノ市町村立小學校教員ニ任セラレトキハ勤績者トス

○文部省訓令第三號 (明治二十五年四月五日)

北海道廳 府縣

明治二十三年(十月)法律第九十號市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ依ル小學校教員恩給ニ關スル翌年度豫算ハ左ノ表式ニ依リ毎年一月三十一日限本大臣ニ報告スヘシ

但明治二十五年年度收入豫算ハ本年五月三十一日限報告スヘシ

明治何年度小學校教員恩給ニ關スル豫算表

小學校教員恩給基金

收入區別	本年度豫算額	前年度豫算額	比	
			増	減
市町村立小學校教員納金				
市町村納金				
前年度歳入剩餘金				
合計				

小學校教員恩給金

收入之部

收入區別	本年度豫算額	前年度豫算額	比	
			増	減
小學校教員恩給基金利子				
國庫給與金				
府縣費補充				
前年度歳入剩餘金				
合計				

  

支出區別	本年度豫算額	前年度豫算額	比	
			増	減
支出之部				
合計				





同上裏面

此證書ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス  
 又水火災等ニ依リ此證書ヲ亡失シタルトキハ居住地ノ市町村  
 長ヲ經テ當廳ニ届出ヘシ  
 本人氏名ヲ改メタルハ此證書ヲ添へ居住地ノ市町村長ヲ經  
 テ當廳ニ届出ヘシ  
 本人死去シタルトキ市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料  
 法ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者アルトキハ扶助料請求書  
 ニ此證書ヲ添付スヘシ扶助料ヲ受クヘキ者ナキトキハ此證書  
 ヲ返納スヘシ  
 表書ノ年額ハ毎年四月七月十月一月ニ其前三箇月分ヲ給ス每  
 期ノ給額左ノ如シ  
 金若干  
 但明治何年何月ノ給額ハ金若干  
 右金額ヲ受領セントスルトキハ此證書ヲ呈示スヘシ

扶助料證書書式 (用紙寸法トモ退隱料證書式ニ同シ)

扶助料證書

族籍

故何小學校訓導位勳爵氏名寡婦  
(孤兒)(父)(母)(祖父)(祖母)

位勳爵氏名

生年月

扶助料年額金若干  
 市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ依リ明治何年何  
 月ヨリ前記ノ扶助料ヲ受クヘキコトヲ認メ此證書ヲ附與ス  
 年 月 日 北海道廳長官府縣知事位勳爵氏名  
 此證書ハ市町村立小學校教員遺族扶助料原簿第何號ニ登錄ス  
 北海道廳府縣書記官位勳爵氏名

備考 公權停止中扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ニ交付スル證書ニハ「明治  
 何年何月ヨリ」トアルヲ「何某公權停止中」ト記スヘシ

同上裏面

此證書ハ賣買讓與質入書入ヌルコトヲ得ス  
 水火災盜難等ニ依リ此證書ヲ亡失シタルトキハ居住地ノ市町  
 村長ヲ經テ當廳ニ届出ヘシ  
 本人氏名ヲ改メタルトキハ此證書ヲ添へ居住地ノ市町村長ヲ  
 經テ當廳ニ届出ヘシ  
 本人死去又ハ權利消滅シタルトキ市町村立小學校教員退隱料  
 及遺族扶助料法ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者アルトキハ  
 扶助料請求書ニ此證書ヲ添付スヘシ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ  
 者ナキトキハ此證書ヲ返納スヘシ  
 表書ノ年額ハ毎四月七月十月一月ニ其前三箇月分ヲ給ス毎  
 期ノ給額左ノ如シ  
 金若干  
 但明治何年何月ノ給額ハ金若干  
 右金額ヲ受領セントスルトキハ此證書ヲ呈示スヘシ

給金與辭令書書式 (用紙適宜輪廓ナシ)

元何小學校訓導 位勳爵氏 名

給與金若干

右市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ依リ之ヲ給ス

年月日

北海道廳府縣

備考 支給規則第十條ノ給與金ノ辭令書ニハ本人肩書ヲ故何小學校訓  
 導位勳爵氏名兄(弟)(姉)(妹)ト記シ兄弟姉妹數名ノトキハ連名  
 ニスヘシ

扶助金辭令書書式(用紙給與金辭令書書式ニ同シ)

故何小學校訓導位勳爵氏名  
寡婦(孤兒)(父)(母)(祖父)(祖母)

位勳爵 氏 名

扶助金若干

右市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ依リ之ヲ給ス

年 月 日

北海道廳府縣

○法律第十三號 (明治廿九年三月廿三日)

公立學校職員退隱料等ニ關スル規定

第一條 明治二十三年法律第九十號ハ第十五條ヲ除キ公立實業補習學校ノ教員ニ適用シ同年法律第九十一號ハ第一條及第二十條ヲ除キ公立ノ高等女學校專門學校實業學校(實業補習學)及其他ノ公立學校ノ學校長教員會監及書記ニ適用ス

第二條 明治二十三年法律第九十號第二條及同年法律第九十一號第三條ハ非職又ハ休職滿期ニヨリ退職シ及校務ノ伸縮ニ依リ退職ヲ命シタル場合ニモ適用ス

退隱料ハ本職最終ノ俸額ニ依リ之ヲ算定ス

第三條 明治二十三年法律第九十號同年法律第九十一號及此ノ法律ニ依リ退隱料等ヲ受クヘキ學校長正教員會監及書記ノ在職年月數ハ各公立學校ノ間ニ於テハ之ヲ通算ス

第四條 府縣立師範學校長タリシ者他ノ文官トナリ若クハ他ノ文官タリシ者府縣立師範學校長トナリタルトキハ其在官年月數ハ明治二十三年法律第九十一號及官吏恩給法ニ於テハ各其ノ規定スル所ニ依リ其ノ在官年數若ハ在職年數中ニ通算スヘキモノトス

第四條ノ二 學校長正教員會監又ハ書記タリシ者教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官ト爲リタルトキ若クハ教官其他教育事務ニ從事スル文官タリシ者學校長正員教員會監又ハ書記ト爲リタルトキハ各其ノ在官在職年數ヲ通算シ明治二十三年法律第九十號及同年法律第九十一號ノ退隱料扶助料扶助金ヲ受クルコトヲ得

通算スルコトヲ得ヘキ官職ノ種類及ヒ通算ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之レヲ定ム

第四條ノ三 同一人ニシテ國庫ヨリ公立學校職員退隱料及官吏恩給又ハ軍人恩給(振恤金、給助金、扶助料ヲ除ク)若ハ同一ノ事由ノ爲メニ公立學校職員遺族扶助料及官吏遺族

扶助法又ハ軍人恩給法ニ依レル扶助料ヲ併セ受クヘキ者アルトキハ本人ノ所擇ニ任セ其ノ一ヲ給ス

附 則

第五條 此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

勅令第三十二號 (明治二十五年四月二日)

府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舎監書記並市町村立小學校正教員ノ退隱料又ハ遺族扶助料ニ關シ行政上ノ處分ニ依リ權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ文部大臣苦クハ府縣知事ノ裁定ハ終審確定ノモノトス

- 一 傷痕疾病ノ原因及其輕重
- 二 職務ニ堪エルト否ラサルト

生 徒

○文部省訓令第五號 (明治三十三年三月二十六日)

北海道廳 府縣 文部省直轄學校

學校生徒ノ喫烟ニ關シテハ小學校ニアリテハ明治二十七年文部省訓令第六號ヲ以テ生徒ノ喫烟スルコト及烟器ヲ夾帶スルコトヲ禁スヘキ旨訓令シ中學校等ニアリテモ實際喫烟ヲ禁止セルモノ多シ學校生徒ノ喫烟ハ衛生上有害ナルノミナラス風紀ニ關スルコト少ナカラス殊ニ此際未成年者喫烟禁止法ノ發布アリタルニ就キテハ小學校中學校師範學校及等位ノ之ニ準スヘキ學校ニアリテハ取締上其ノ生徒ノ成年以下ナルト以上ナルト學校ノ内外トヲ問ハス喫烟シ及烟草烟器ヲ夾帶スルコトヲ禁止スヘシ其ノ他ノ學校ニアリテモ特ニ注意ヲ加ヘ法律違反ノモノナカラシメムコトヲ期スヘシ

○文部省訓令第十號 (明治三十二年七月一日)

北海道廳 府縣

本大臣就任ノ初ヨリ學校ノ事態ニ關シ衷心竊ニ憂慮スル所アリ是ヲ以テ本年四月地方長官召集ノ機ニ際シ本大臣ハ學校ノ風紀ヲ正シ規律ヲ嚴ニスヘキコトヲ反復披陳シテ其ノ注意ヲ促シタリ

今ヤ改正條約實施ノ期僅ニ數日ヲ出テサラントシ茲ニ新ニ  
 詔勅ヲ下シタマフ蓋將來外國人ノ内地ニ來往居住スル者滋々多キヲ致スヘシ此ノ時  
 ニ際シ若シ學校生徒ヲシテ放漫自ラ制セス或ハ禮節ヲ藐視シ或ハ粗野ノ行爲ヲ敢テ  
 シ奇矯是レ喜フ如キ陋習ヲ長セシムルコトアラハ獨リ教育上ノ失體タルノミナラス  
 延イテ國家ノ威信ヲ失墜シ其ノ體面ヲ汚瀆スルコトナキヲ保セス宜シク恭ミテ  
 教旨ヲ奉體シ此ノ際尙一層學校長及教員ヲ督勵シ能ク戒慎ヲ加ヘ篤ク本分ヲ殫シ以  
 テ生徒教養ノ方ヲ誤ルコトヲ期セシムルニ努ムヘシ

○文部省令第四號 (明治三十三年三月二十六日)

學生生徒身體檢査規程

第一條 學生生徒ノ身體檢査ハ每年四月及十月ニ於テ之ヲ施行スヘシ但シ滿二十年  
 以上ノ學生生徒ニ就キテハ四月ノ一回ニ止ムルコトヲ得  
 學校長ニ於テ必要ト認ムルトキハ學生生徒ニ就キ臨時身體檢査ノ全部若ハ一部ヲ  
 施行スルコトヲ得

第二條 明治三十一年勅令第二號第一條第三項ニ依リ學校醫ヲ置カサル町村立學校  
 及私立ノ小學校及各種學校ハ本令ノ身體檢査ヲ行ハサルコトヲ得

第三條 身體檢査ハ學校醫ヲシテ之ヲ行ハシムヘシ但シ學校醫ヲ置カサル場合ニ於

テハ他ノ醫師ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

第四條 身體檢査ハ左ノ項目ニ就キ施行スヘシ

- 一 身長
- 二 體重
- 三 胸圍
- 四 脊柱
- 五 體格
- 六 視力
- 七 眼疾
- 八 聽力
- 九 耳疾
- 十 齒牙
- 十一 疾病

毎年十月ニ於テ施行スル檢査ニ在リテハ身長、體重及疾病ノ三項目ニ止ムルコト  
 ヲ得

小學校生徒ニ在リテハ視力及聽力ノ二項目ヲ檢査スルコトヲ要セス但シ著シキ障  
 害アリト認ムル者ハ此限ニ在ラス

第五條 身體檢査ハ左ノ各號ニ準據シテ施行スヘシ

- 一 檢査器械ハ「メイトル」式ニ從ヒ衡器ハ水準器ヲ具ヘタルモノヲ可トス
- 二 檢査ノ表記ニハ衡ハ「キログラム」度ハ「センチメートル」ヲ以テ一位トシ以下  
 四捨五入法ヲ用ヒテ小數一位ヲ作ルヘシ
- 三 身長ヲ測定スルニハ足袋、靴等ヲ脱セシメ兩蹠ヲ密接シテ直立シ兩上肢ヲ鉛  
 直ニ垂レ頭部ヲ正位ニ保タシムヘシ又女子ニシテ髻アル者ハ小桿ヲ髻下ヨリ  
 水平ニ横ヘテ測定スヘシ
- 四 體重ハ著衣ノ儘測定セサルヲ可トス若シ著衣ノ儘又ハ檢査服ヲ着用セシメタ

- 五 ルトキハ其ノ風袋ヲ全量ヨリ除去スヘシ  
胸圍ハ兩上肢ヲ鉛直ニ垂レ自然ノ位置ニ在ラシメ乳頭ノ水平線ニ於テ常時ヲ測定スヘシ充盈、空虛ノ差ヲ測定スルトキ亦同シ但シ小學校生徒ニ在リテハ常時ノミヲ測定スルモノトス
  - 六 脊柱ハ正、左彎、右彎、後屈及屈彎ノ程度ヲ検査シ強中弱ノ三種ニ區別スヘシ
  - 七 體格ハ強健、中等、薄弱ノ三等ニ區別スヘシ
  - 八 視力ハ中心視力ヲ兩眼ニ就キテ各別ニ検査スヘシ
  - 九 聽力ハ其ノ障害ノ有無ヲ検査スヘシ
  - 十 齒牙ハ齲齒ノ有無ヲ検査スヘシ
  - 十一 疾病ハ腺病、營養不良、貧血、脚氣、肺結核、頭痛、衄血、神經衰弱其ノ他慢性疾患等検査ノ際ニ發見シタルモノヲ記入スヘシ
- 前各號ノ外身體検査上必要ト認メタル事項ハ特ニ検査ヲ行フヘシ
- 第六條 身體検査ヲ施行シタルトキハ左ノ様式ニ依リ身體検査票ヲ調製スヘシ

校何)		姓名		出生年月		身長		體重		胸圍		脊柱		番檢號查		検査年月		
																	名	
校何)		姓名		學年		視力		眼疾		聽力		耳疾		齒牙		疾病		検査醫姓名印

身體検査票 (男) (女)





授業料

勅令第五號(明治二十九年二月六日)

第一條 戰地ニ於ケル勤務ニ起因シテ死去シタル者ノ遺族ニシテ左ニ掲ケタル者ニ對

シテハ市町村立小學校ニ於テ授業料ヲ徵收セサルモノトス

一 軍人恩給法第二十七條第一ニ該當スル者及第四十條ニ掲ケタル者ニシテ第二

十七條第一ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹

二 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹

三 明治二十七年勅令第十六十四號第一條第一項ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹

前項ノ遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ者ナキモ死者ノ前項ニ該當シタル事實明白ナルトキハ其ノ同籍内ニ在ル弟妹ニ對シ前項ヲ適用ス

第二條 戰地ニ於ケル勤務ニ起因シテ軍人恩給法第九條第十四條又ハ官吏恩給法第

三條ニ該當スル者又ハ戰地ニ於テ傷痍ヲ受ケ疾病ニ罹リ明治二十七年勅令第六

十四號ニ依リ手當金ヲ受クル者又ハ公務ニ依リ從軍シタル者ノ同籍内ニ在ル子及

弟妹ニ對シテハ市町村會ノ議決ニ依リ市町村立小學校ニ於テ授業料ヲ減額シ又ハ

之ヲ徵收セサルモノトヲ得

第三條 本令ニ依リ減額シ又ハ徵收セルル授業料ニシテ已ニ納付済ノモノハ還付セ

サルモノトス但市町村會ニ於テ還付ノ議決ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニアラス

第二編 總則 中學校及高等女學校

總則

勅令第二十八號(明治三十二年二月六日)

中學校令

- 第一條 中學校ハ男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス
- 第二條 北海道及府縣ニ於テハ土地ノ情況ニ應ジ一箇以上ノ中學校ヲ設置スヘシ  
文部大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ府縣ニ中學校ノ増設ヲ命スルコトヲ得
- 第三條 前條ノ中學校ノ經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除ク外府縣ノ負擔トス
- 第四條 郡市町村 北海道及沖繩縣又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其ノ區域内小學教育ノ施設上妨ナキ場合ニ限り中學校ヲ設置スルコトヲ得
- 第五條 私人ハ本令ノ規定ニ依リ中學校ヲ設置スルコトヲ得
- 第六條 土地ノ情況ニ依リ中學校ノ分校ヲ必要トスル時ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ設置スルコトヲ得但シ一校ニ付一分校ニ限ル
- 第七條 中學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ  
中學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム



第一章 中學校及其程度

○ 第二章 學年教授日數及式日

第三章 編制

第四章 設備

第五章 設置及廢止

第六章 入學、退學及懲戒

第七章 補則

第八章 附則

中學校令施行規則

第一章 學科及其程度

第一條 中學校ノ學科目ハ修身、國語及漢文、外國語、歷史、地理、數學、博物、物理及

化學、法制及經濟、圖畫、唱歌、體操トス

外國語ハ英語、獨語又ハ佛語トス

第二條 修身ノ教育ニ關スル勸語又旨趣ニ基キ道德上ノ思想及情操ヲ養成シ中等以

上ノ社會ニ於テアル男子ニ必要ナル品格ヲ具ヘシメンコトヲ期シ實踐躬行ヲ勸獎ス

ルヲ以テ要旨トス

修身ハ初ハ嘉言善行等ニ徴シ生徒日常ノ行狀ニ因ミテ道德ノ要領ヲ教示シ進ミテハ稍々秩序ヲ整ヘテ自己、家族、社會及國家ニ對スル責務ヲ知ラシメ又倫理學ノ一斑ヲ授クベシ

第三條 國語及漢文ハ普通ノ言語文章ヲ了解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シメ文學上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓發ニ資スルヲ以テ要旨トス

國語及漢文ハ現時ノ國文ヲ主トシテ講讀セシメ進ミテハ近古ノ國文ニ及ホシ又實用簡易ナル文ヲ作ラシメ文法ノ大要國文學史ノ一般ヲ授ケ又平易ナル漢文ヲ講讀セシメ且習字ヲ授クベシ

第四條 外國語ハ普通ノ英語、獨語又ハ佛語ヲ了解シ且之ヲ運用スルノ能ヲ得シメ兼テ知識ノ増進ニ資スルヲ以テ要旨トス

外國語ハ發音、綴字ヨリ始メ簡易ナル文章ノ讀方、譯解、書取、作文ヲ授ケ進ミテハ普通ノ文章ニ及ホシ又文法ノ大要會話及習字ヲ授クベシ

第五條 歴史ハ歷史上重要ナル事蹟ヲ知ラシメ社會ノ變遷、邦國盛衰ノ由ル所ヲ理解セシメ特ニ我國ノ發達ヲ詳ニシ國體ノ特異ナル所以ヲ明ニスルヲ以テ要旨トス

歴史ハ日本歴史及外國歴史トシ日本歴史ニ於テハ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ重要

學事應予授外國歷史之於其世界大勢之變遷關係之事實ヲ主トシ著名史家  
 諸國ノ興亡ノ大變ノ發達及我國ノ文化ニ關係アル事實ヲ要知シ之ヲ以テ  
 第六條 地理ハ地球ノ形狀運動地球表面及人類生活ノ狀態ヲ理解セシメ我國及  
 諸外國ノ國勢支那ヲ並ムルヲ以テ要旨要旨ヲ授クヘシ  
 地理ハ日本地理學ヲ我國ニ重要ニ關係スル諸外國ノ地理ノ要旨ヲ知ラシメ又地文  
 學ニ關係授クヘシ  
 算術 以圖形下算術ノ要旨ヲ授クヘシ  
 數學ハ算術ヲ代數初歩及平面幾何ヲ授クヘシ  
 第七條 數學ハ數量ノ關係及測度ニ對シテ習熟セシメ兼テ思考ヲ精確ナラシムルヲ  
 以テ要旨要旨ヲ授クヘシ  
 國語要旨 國語ハ國文ニ主シテ其要旨ヲ授クヘシ  
 第八條 博物ハ天然物ニ關スル知識ヲ授クヘシ其ノ相互及人類ニ對スル關係ヲ理解セシ  
 博物ノ重要ナル植物、動物、礦物ニ關スル一般ノ知識並ニ人體ノ構造、生理及術  
 生ノ大要ヲ授クヘシ  
 第九條 物理及化學ハ自然現象ニ關スル知識ヲ授クヘシ其ノ原理則並ニ人生ニ對スル關  
 係ヲ理解セシムルヲ以テ要旨トス

物理及化學ハ重要ナル物理上及化學上ノ現象及定律、器械ノ構造及作用、元素及  
 化合物ニ關スル知識ヲ授クヘシ  
 第十條 法制及經濟ハ法規ノ大要及理財、財政ノ一斑ヲ授クヘシ  
 第十一條 圖畫ハ物體ヲ精密ニ觀察シ正確且自由ニ之ヲ畫クノ能ヲ得シメ意匠ヲ練  
 習シ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス  
 第十二條 圖畫ハ自在畫及用器畫トシ自在畫ニ於テハ寫生畫ヲ主トシ臨畫ヲ加ヘ授ク又時々  
 自己ノ考案ヲ以テ畫カシメ用器畫ニ於テハ幾何畫ヲ授クヘシ  
 第十三條 唱歌ハ歌曲ヲ唱スコトヲ得シメ美感ヲ養ヒ心情ヲ高潔ニシ兼テ德性ノ涵  
 養ニ資スルヲ以テ要旨トス  
 第十四條 唱歌ハ單音歌ヲ授ク又便宜輪唱歌、複音唱歌ヲ授クヘシ  
 第十五條 體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ之ヲ強健ナラシメ四肢ノ動作ヲ  
 敏捷ナラシメ精神ヲ快活剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ遵守及協同ヲ尚フノ習慣ヲ養フヲ  
 以テ要旨トス  
 第十六條 體操ハ普通體操及兵式體操トシ普通體操ニ於テハ正術、徒手體操、器械體操、球

卒体操及棍棒体操ヲ授ク兵式体操ニ於テハ柔軟体操ヲ器械体操、各個教練、小隊教練及中隊教練ヲ授クヘシ

第十四條 各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ左表ニ依ルヘシ

學科目	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	一	一	一	一	一
國語及漢文	七	七	七	六	六
外國語	七	七	七	七	六
歷史	三	三	三	三	三
地理	三	三	三	三	三
數學	三	三	五	五	四
博物	二	二	二	四	四
物理及化學				四	四
法制及經濟					三

圖畫	一	一	一	一	
唱歌	一	一	一	一	
體操	三	三	三	三	三
計	二八	二八	三〇	三〇	三〇

法制及經濟ヲ缺キタル學校ニ於テハ其每週教授時數ハ外國語、歷史、地理ニ唱歌ヲ缺キタル學校ニ於テハ其每週教授時數ハ圖畫ニ配當スヘシ

第十五條 補習科ノ學科目ハ第一條ノ學科目中ニ就キ之ヲ定ムヘシ

補習科ノ各學科目ハ隨意科目ト爲スコトヲ得

第二章 學年、教授日數及式日

第十六條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

學年ハ分テ三學期トシ第一學期ハ四月一日ヨリ八月三十一日マテトシ第二學期ハ

九月一日ヨリ十二月三十一日マテトシ第三學期ハ翌年一月一日ヨリ三月三十一日

マテトス

前二項ノ規定ハ補習科ニ關シテハ之ヲ適用セス

第十七條 教授日數ハ毎學年三百日以上トス但シ次條ノ場合及特別ノ事情ニ依リ文

部大臣ノ認可ヲ受ケタル場合一於テハ此ノ限ニアラス

試験及修學旅行ニ充ツル日數ハ前項ノ日數ニ算入セズ

第十八條 傳染病豫防ノ爲必要ナルトキ其ノ他非常變災アルトキハ臨時休業ヲ爲サ

ルシムルコトヲ得

前項ノ事由アルトキハ地方長官ハ道廳府縣立以外ノ中學校ノ休業ヲ命スルコトヲ

得

前二項ノ場合ニ於テハ事由ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ届出ツヘシ

第十九條 紀元節、天長節及一月一日ニハ職員及生徒學校ニ參集シテ祝賀ノ式ヲ行

フヘシ

### 第三章 編 制

第二十條 中學校ノ生徒數ハ四百人以下トス但シ特別ノ事情アルトキハ六百人マテ

之ヲ増スコトヲ得

分校ノ生徒ハ三百人以下トス

補習科ノ生徒數ハ前學年ニ於テ當該學校ヲ卒業シタル者ノ數ヲ超ユルコトヲ得ス

前項ノ生徒數ハ第一項ノ生徒數ニ算入セス

第二十一條 學級ハ同學年ノ生徒ヲ以テ之ヲ編制セヘシ

一學級ノ生徒數ハ五十人以下トス

第二十二條 脩身、唱歌及体操ハ學年又ハ學級ノ異ナル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ教

授スルコトヲ得

第二十三條 分校ニハ第四學年以上ノ生徒ヲ置クコトヲ得ス

第二十四條 教員ノ數ハ五學級以下ノ學校ニ於テハ一學級毎ニ二人以上トシ五學級

以上一學級ヲ加フル毎ニ一人半以上ノ割合ヲ以テ之ヲ増スヘシ但シ一學級毎ニ一

### 第四章 設 備

第二十五條 中學校又ハ其ノ分校ニ於テハ校地、校舍、寄宿舎、体操場及校具ヲ備

フヘシ

但シ文部大臣ノ認可ヲ受ケ寄宿舎ヲ備ヘサルコトヲ得

第二十六條 校地ハ學校ノ規模ニ適應セル面積ヲ有シ道德上並ニ衛生上害ナキ所タ

ルヘシ

第二十七條 校舍ハ教授上、管理上並ニ衛生上適當ニシテ質朴堅牢ナランコトヲ要

ス

第二十八條 校舍ニハ左ノ諸室ヲ備フヘシ

- 一 通常教室
- 二 博物、物理及化學、圖畫ノ各特別教室
- 三 講堂
- 四 圖畫室、器械室、標本室
- 五 職員室、生徒控所其他必要ナル諸室  
博物、物理及化學ノ特別教室ハ便宜兼用スルコト得  
講堂、教室ハ便宜兼用スルコトヲ得  
圖畫室、器械室、職員室ハ便宜兼用スルコトヲ得
- 第二十九條 教室ノ大ハ一學級ノ生徒ヲ容ル、ニ足ルヲ度トシ生徒一人ニ付容積百二十立方尺ノ割合ヨリ小ナルヘカラス
- 第三十條 寄宿舎ニハ自修室、寢室、舍監室、食堂、應接所、浴室、盥嗽所、病室等ヲ備フヘシ自修室、寢室ハ便宜兼用スルコトヲ得
- 第三十一條 自修室ノ大ハ生徒一人ニ付容積三百二十四立方尺、寢室ノ大ハ生徒一人ニ付容積四百八十六立方尺、自修室、寢室ヲ兼用スルトキハ生徒一人ニ付容積五百六十七立方尺ノ割合ヨリ小ナルヘカラス
- 第三十二條 體操場ハ分テ屋外體操場及屋内體操場トス

- 屋外體操場ハ方形若ハ之ニ類スル形狀ニシテ二千坪以上ノ面積ヲ備フヘシ但シ特別ノ事情アルトキハ千坪マテニ減スルコトヲ得
- 屋内體操場ハ生徒控所ニ兼用シ又ハ土地ノ情況ニ依リ之ヲ設ケサルコトヲ得
- 第三十三條 校具ハ圖畫、器械、器具、標本、模型及表簿等トス
- 第三十四條 中學校又ハ其ノ分校ニ於テ備フヘキ表簿ノ種類左ノ如シ
  - 一 中學校ニ關係アル法令
  - 二 學則、日課表、教科用圖書配當表及學校醫視察簿
  - 三 職員ノ名簿、履歷書、出勤簿並ニ擔任學科目及時間表
  - 四 生徒ノ學籍簿、出席簿、身體檢查ニ關スル表及徵兵猶豫ニ關スル書類
  - 五 入學試驗及學年試驗ノ問題、答案及成績表
  - 六 資產原簿、出納簿、經費ノ豫算決算ニ關スル帳簿及圖書、器械、器具、標本、模型ノ目錄
  - 七 往復書類
- 生徒學籍簿ニハ生徒ノ氏名、族籍、居所、生年月、入學前ノ學歷、入學、轉學、退學、卒業ノ年月日、入學試驗ノ有無、轉學、退學ノ事由、徵兵事故、保證人ノ氏名及居所等ヲ記載スヘシ



第一項ノ表簿中生徒學籍簿ハ永久之ヲ保存シ其ノ他ノ表簿ハ五箇年以上之ヲ保存スヘシ

第三十五條 土地ノ情況ニ依リ學校長、舍監及教員ノ住宅ヲ設クヘシ

第三十六條 校舍、寄宿舎ヲ設ケ又ハ之ヲ變更セントスルトキハ圖面ヲ具シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三十七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ假校舍ヲ使用スルコトヲ得

- 一 新ニ中學校又ハ其ノ分校ヲ設置スルトキ
- 二 非常變災アリタルトキ

前項第一號ノ場合ニ於テ假校舍ヲ使用シタルトキハ遲滯ナク文部大臣ニ届出ツヘシ

前項ノ規定ニ依リ認可ヲ申請シ又ハ届出ツルトキハ其ノ事由及使用期間ヲ具シ且前條及次條第四項ノ圖面、分析表ヲ添附スヘシ

第五章 設置及廢止

第三十八條 中學校又ハ其ノ分校ノ設置ニ就キ認可ヲ受ケントスルトキハ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スヘシ

- 一 名 稱

二 生徒定員

三 開校年月

四 經費及維持ノ方法

前項ノ事項ノ外公立學ニ就キテハ地方長官ニ於テ位置ノ認可ヲ申請シ私立學校ニ就キテハ設立者ニ於テ位置ヲ具シ申請スヘシ

第一項第號乃至第三號及位置ノ變更ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

前二項ノ位置ニ關スル申請ニハ校地ノ面積、地質、屋外体操場ノ區域、面積並ニ附近ノ情況ヲ記載シタル圖面及飲用水ノ定性分析表ヲ添附スヘシ

第三十九條 中學校又ハ其ノ分校ノ廢止ニ就キ認可ヲ受ケントスルトキハ其ノ事由及生徒ノ處分方法ヲ具シ文部大臣ニ申請スヘシ

第四十條 公立中學校ノ費用負擔者ヲ變更シ、私立中學校ヲ公立中學校ニ公立中學校ヲ私立中學校ニ變更シ、若ハ分校ヲ獨立中學校ト爲サントスルトキハ第三十八條第一項ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第六章 入學、在學、退學及懲戒

第四十一條 生徒ヲ入學セシムヘキ時期ハ學年ノ始ヨリ三十日以内トス  
但シ缺員アルトキハ第二學期及第三學期ノ始ヨリ十日以内ニ臨時入學セシムル

コトヲ得

人ハ他ノ職ヲ兼テス又ハ他ノ職ヨリ兼テサルコトヲ要ス

第四十二條 第一學年入學志願者中高等小學校第二學年ノ課程ヲ卒ラサル者ニ就キテハ試験ニ依リテ其學力ヲ檢定スヘシ

第一學年入學志願者中高等小學校第二學年ノ課程ヲ卒リタル者ハ其ノ他ノ志願者ニ先チテ入學ヲ許スコトヲ得

高等小學校第二學年ノ課程ヲ卒リタル者ノ數入學ヲ許スヘキ人員ニ超過スルトキハ試験ニ依リテ入學者ヲ選拔スヘシ

第四十三條 前條第一項ノ試験ハ國語、算術、日本歴史、地理ニ就キ同條第三項ノ試験ハ國語、算術ニ就キ高等小學校第二學年ノ程度ニ依リテ之ヲ行フヘシ

第四十四條 第二學年以上ニ入學ヲ許スヘキ者ハ相當年齡ニ達シ前各學年ノ課程ヲ卒リタル者ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

前項入學者ノ學力ハ前各學年ノ程度ニ於テ其ノ各學科目ニ就キ試験ニ依リテ檢定スヘシ

第四十五條 中學校生徒ニシテ退學シタル者一箇以內ニ其ノ中學校ニ再入學ヲ志願シタルトキハ試験ニ依ラスシテ原學年以下ノ學年ニ入學ヲ許可スルコトヲ得

第四十六條 他ノ中學校ニ轉學ヲ志望スル生徒アルトキハ學校長ハ正當ノ事由アリ

ト認メタル場合ニ限リ其ノ生徒ノ在學證書及成績表ヲ移轉先學校ニ送附スヘシ

移轉先學校ニ於テハ缺員アル場合ニ限リ前項生徒ノ轉學ヲ許可スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ轉學ヲ許可スル生徒ハ試験ヲ行ハスシテ同一學年ニ編入スルコトヲ得

第四十七條 各學年ノ課程ノ修了又ハ全學科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業及試験ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ

試験ハ分テ學期試験及學年試験トシ學期試験ハ第一學期及第二學期內ニ於テ之ヲ行ヒ學年試験ハ學年末ニ於テ之ヲ行フヘシ

第四十八條 學校長ハ一學年ノ課程ヲ修了セザル生徒ノ學年ヲ進ムルコトヲ得ス

第四十九條 學校長ハ中學校ヲ卒業セザル者ニハ卒業證書ヲ授與スヘシ

第五十條 補習科ニ入學スルコトヲ得ル者ハ中學校ヲ卒業シタル者タルヘシ

學校長ハ補習科ヲ修了セリト認メタル者ニハ卒業證書ヲ授與スルコトヲ得

第五十一條 學校長ハ左ノ各號ニ該當スル者ニハ退學ヲ命スヘシ

一 品行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三 引續キ一箇年以上缺席シタル者

四 正當ノ事由ナクシテ引續キ一箇月以上缺席シタル者

第五十二條 生徒退學セントスルトキハ學校長ノ許可ヲ受クヘシ

第五十三條 學校長ハ教育上必要ト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第七章 補則

第五十四條 中學校ノ學則ヲ定メタルトキハ遲滯ナク文部大臣ニ届出ツヘシ其ノ之

ヲ變更シタルトキ亦同シ

學則中ニ規定スヘキ事項凡左ノ如シ

- 一 休業日ニ關スル事項
- 二 學科課程、教授時數ニ關スル事項
- 三 試験ニ關スル事項
- 四 生徒ノ入學、退學、懲戒ニ關スル事項
- 五 授業料、入學料等ニ關スル事項
- 六 寄宿舎ニ關スル事項

第五十五條 道廳府縣立以外ノ中學校ニ關シ文部大臣ニ提出スヘキ文書ハ地方長官

ヲ經由スヘシ  
前項ノ文書中、學校ノ設置及廢止ニ關スル申請ニ就キテハ地方長官ハ其ノ意見ヲ具スヘシ

第五十六條 本令中、學校長トアルハ私立學校ニ在リテハ其ノ學校ヲ代表シ校務ヲ掌理スル者ヲ包含ス

第八章 附 則

第五十七條 本令ハ明治三十四年四月一日ヨリ施行ス

第五十八條 本令施行ノ際現ニ中學校ニ在學スル生徒ニ課スヘキ學科目及其ノ程度ニ關シテ其ノ生徒ノ卒業スルニ至ルマテ仍從前ノ例ニ依ルコトヲ得

第五十九條 明治二十七年文部省令第七號及同第十三號ノ規定ニ依リ設ケタル中學校ノ實科ハ本令施行ノ際現ニ在學スル生徒ノ卒業スルニ至ルマテ仍從前ノ例ニ依ル

第六十條 明治三十二年文部省令第三號第二十三條乃至第二十五條ノ規定ニ依リ中學校ノ編制及設備ニ關シ文部大臣ノ與ヘタル認可ハ本令ノ規定ニ依リ其ノ効力ヲ失フコトナシ

第六十一條 明治十九年文部省令第十四號、明治二十七年文部省令第七號、同策十

三號、明治三十一年文部省令第三號、同第四號、同第十四號、同第三十三號代之

又廢止ス 明治三十一年文部省令第三號、同第四號、同第十四號、同第三十三號代之

勅令第三十一號 (明治三十二年二月七日)

高等女學校令 高等女學校ノ設置ニ關スル事ニ付、高等女學校ノ設置ニ關スル事ニ付、

第一條 高等女學校ノ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 北海道及府縣ニ於テハ高等女學校ヲ設置スヘシ

第三條 前條ノ高等女學校ノ經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除ク外府縣ノ負擔トス

第四條 郡市町村北海道及沖繩縣ノ區ヲ含ム又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其

ノ區域内小學教育ノ施設上妨ナキ場合ニ限り高等女學校ヲ設置スルコトヲ得

第五條 郡市町村立ノ高等女學校ニシテ府縣立高等女學校ニ代用スルニ足ルヘキモ

ノアルトキハ地方長官ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ府縣費ヲ以テ相當ノ補助ヲ與

ヘ第三條ノ設置ニ代フコトヲ得

第六條 由私人ハ本令ノ規定ニ依リ高等女學校ヲ設置スルコトヲ得

第七條 高等女學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

高等女學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條 公立高等女學校ノ位置ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第九條 高等女學校ノ修業年限ハ四箇年トス但シ土地ノ情況ニ依リ一箇年ヲ伸縮ス

ルコトヲ得

第十條 高等女學校ニ於テハ三箇年以内ノ補習科ヲ置クコトヲ得

第十一條 高等女學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齢十二年以上ニシテ高等小學校第

二學年ノ課程ヲ卒シタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第十二條 高等女學校ニ於テハ女子ニ必要ナル技藝ヲ專修セントスル者ノ爲ニ技藝

專修科ヲ置クコトヲ得

第十三條 高等女學校ニ於テハ其ノ卒業生ニシテ某學科ヲ專攻セントスル者ノ爲ニ專攻科ヲ

置クコトヲ得

第十四條 高等女學校ノ學科及其ノ程度ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十五條 高等女學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノニ就キ地方長官ノ認

可ヲ經テ學校長之ヲ定ム但シ文部大臣ノ檢定ヲ經サル教科書ヲ使用スル必要アル

トキハ地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ一時其ノ使用ヲ認可スルコトヲ得

高等女學校教科書ノ檢定ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四條 高等女學校ノ教員ハ文部大臣ノ授與シタル教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ但シ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ本文ノ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

高等女學校教員ノ免許ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十五條 公立高等女學校職員ノ俸給旅費其ノ他諸給與ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第十六條 高等女學校ノ編制及設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十七條 公立高等女學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スヘシ但シ特別ノ場合ニ於テハ之ヲ減免スルコトヲ得

授業料入學校等ニ關スル規則ハ公立學校ニ在リテハ地方長官ニ於テ私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第十八條 本令ノ規定ニ依ラサル學校ハ高等女學校ト稱スルコトヲ得ス

第十九條 本令施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附 則

第二十條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ本令施行ノ日ヨリ四箇年以内第二條ノ設置ヲ延

期スルコトヲ得

○文部省令第四號(明治三十四年三月二十二日)

高等女學校令施行規則

第一章 學科及其程度

第二章 學年、教授日數及式日

第三章 編制

第四章 設備

第五章 設置及廢止

第六章 入學、在學、退學及懲戒

第七章 補則

第七章 附 則

高等女學校令施行規則

第一章 學科及其程度

第一條 高等女學校ノ學科目ハ、修身、國語、外國語、歷史、地理、數學、理科、圖書、家事、裁縫、音樂、体操トス但シ修業年限ヲ短縮シタル學校ニ於テハ外國語ヲ缺ク

外國語ハ英語又ハ佛語トス

外國語之ヲ缺ク又ハ隨意科目ト爲シコトヲ得ル

音樂ハ學習困難ナリト認メタル生徒ニ以テ之ヲ課セサルコトヲ得ル

第一項ノ學科目ノ外隨意科目トシテ教育、手藝ノ一科目又ハ二科目ヲ加フルコト

ヲ得但シ修業年限ヲ短縮シタル學校ニ於テハ此ノ限ニアラス

第二條 修身ハ教育ニ關スル勸語ノ旨趣ニ基キ道德上ノ思想及情操ヲ養成シ中等以

上ノ社會ニ於ケル女子ニ必要ナル品格ヲ具ヘシメンコトヲ期シ實踐躬行ヲ勸奨ス

ルヲ以テ要旨トス

修身ハ初ハ嘉言善行等ヲ徴シ又生徒日常ノ行狀ニ因ミテ道德ノ要領ヲ教示シ又作

法ヲ授ケ進ミテハ稍々秩序ヲ整ヘテ自己、家族、社會及國家ニ對スル責務ヲ知ラ

スルヘシ

第三條 國語ハ普通ノ言語、文書ヲ可解シ正確且自由ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ得シ

メ文學上ノ趣味ヲ養ヒ兼テ智徳ノ啓發ニ資スルヲ以テ要旨トス

國語ハ現時ノ文章ヲ主トシテ講讀セシメ進ミテハ近古ノ文章ヲ及ホシ又實用簡易

ナル文ヲ作ラシメ文法ノ大要及習字ヲ授クヘシ

第四條 外國語ハ普通ノ英語又ハ佛語ヲ了解シ且之ヲ運用スルノ能ヲ得シメ兼テ智

識ノ増進ニ資スルヲ以テ要旨トス

外國語ハ發音、綴字ヨリ始メ簡易ナル文章ノ綴方、譯解、書取、作文ヲ授ケ進ミ

テハ普通ノ文章ニ及ホシ又文法ノ大要、會話及習字ヲ授クヘシ

第五條 歴史ハ歴史上重要ナル事蹟ヲ知ラシメ社會ノ變遷、文化ノ由來ヲ理會セシ

メ特ニ我國ノ發達ヲ詳ニシ國體ノ特異ナル所以ヲ明ニスルヲ以テ要旨トス

歴史ハ我國ノ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ重要ナル事蹟ヲ授ケ兼テ外國歴史ノ大要

ヲ授クヘシ

第六條 地理ハ地球ノ形狀、運動並ニ地球表面及人類生活狀態ヲ理會セシメ我國及

諸外國ノ國勢ヲ知ラシムルヲ以テ要旨トス

地理日本地理並ニ我國ト重要ノ關係アル諸外國ノ地理ノ大要ヲ知ラシメ兼テ地文

ノ一斑ヲ授クヘシ

第七條 數學ハ數量ノ關係ヲ明ニシ計算ニ習熟セシメ兼テ生活上必要ナル事項ヲ知

ラシメ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

數學ハ算術ヲ授クヘシ又學校ノ修業年限ニ應ジ代數ノ初步及平面幾何ノ初步ヲ授

クベコトヲ得

第八條 理科ハ天然物及自然ノ現象ニ關スル智識ヲ與ヘ其ノ法則並ニ其ノ相互及人

生ニ對スル關係ヲ理會セシメ兼テ日常ノ生活ニ資スルヲ以テ要旨トス  
理科ハ重要ナル植物、動物、礦物ニ關スル一般ノ智識、人體ノ構造、生理及衛生  
ノ大要茲ニ重要ナル物理上及化學上ノ現象及定律、器械ノ構造及作用、元素及化  
合物ニ關スル智識ヲ授クヘシ

第九條 圖畫ハ物體ヲ精密ニ觀察シ正確且自由ニ之ヲ書クハ能ヲ得シメ意匠ヲ練リ  
美感ヲ養フヲ以テ要旨トス  
圖畫ハ自在畫トシ寫生畫ヲ主トシ臨畫ヲ加ヘ授ケ又時々自己ノ考案ヲ以テ畫カシ  
ムヘシ

前項ノ外幾何畫ノ初歩ヲ授クルコトヲ得  
第十條 家事ハ家事整理上必要ナル智識ヲ得シメ兼テ勤勉、節儉、秩序、周密、清  
潔ヲ尙フノ念ヲ養フヲ以テ要旨トス  
家事ハ衣食住、看病、育兒、家計簿記其ノ他家ノ整理、經濟等ニ關スル事項ヲ  
授クヘシ

第十一條 裁縫ハ裁縫ニ關スル智識技能ヲ得シメ兼テ節約利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ  
要旨トス  
裁縫ハ普通ノ衣類ノ縫ヒ方裁チ方及繕ヒ方ヲ授クヘシ

第十二條 音樂ハ音樂ニ關スル智識技能ヲ得シメ美感ヲ養ヒ心情ニ高潔ニシ兼テ德  
性涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス  
音樂ハ單音唱歌ヲ授ケ又便宜輪唱歌及複音唱歌ヲ交ヘ樂器使用法ヲ授クヘシ

第十三條 體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメテ之ヲ強健ナラシメ四肢ノ動作ヲ  
機敏ナラシメ容儀ヲ整ヘ精神ヲ快活ニシ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣ヲ養フ  
ヲ以テ要旨トス  
體操ハ普通體操及遊戲トシ普通體操ニ於テハ矯正術、徒手體操、啞鈴體操ヲ授ケ  
又便宜球竿體操及豆莖體操ヲ授クヘシ

第十四條 教育ハ教育ニ關スル普通ノ知識ヲ得シメ家庭教育ニ資スルヲ以テ要旨ト  
ス  
教育ハ教育ノ理論ノ大要ヲ授クヘシ

第十五條 手藝ハ女子ニ適切ナル手藝ヲ習ハシメ指手ノ動作ヲ巧緻ナラシメ兼テ勤  
勉ヲ好ムノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス  
手藝ハ編物、組絲、囊物、刺繡、造花等土地ノ情況ニ適切ナルモノヲ授クヘシ

第十六條 各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ左表ニ依ルヘシ

學科	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
修身	二	二	二	二
國語	六	六	五	五
外國語			三	三
歷史	三	三	二	三
地理	三	三	二	三
數學	二	二	二	二
理科	二	二	二	二
圖畫	一	一	一	一
家事			二	二
裁縫	四	四	四	四
音樂	二	二	二	二

體育 三  
 教育 三  
 手藝 三  
 計 二八

教育ヲ加ヘタルトキハ其ノ每週教授時數ハ二時トシ第四學年ニ於テ國語ノ每週教授時數ヲ減シテ之ニ充テ手藝ヲ加ヘタルトキハ其ノ每週教授時數ハ二時トシ二學年以上裁縫ノ每週教授時數ヲ減シテ之ニ充ツヘシ又外國語ヲ缺キタル學校ニ於テハ其ノ每週教授時數ハ便宜他ノ學科目ニ配當スヘシ  
 修業年限ヲ延長シタルトキハ各學年ニ於ケル各學科目ノ每週教授時數ハ左表ニ依ルヘシ

學科	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	二	二	二	二	二
國語	六	六	六	五	五





圖	畫	家	裁	音	體	計
書	事	縫	樂	操		
二			四	三	三	三八
二			四	二	三	三八
一			四	三	三	二八

土地ノ狀況ニ依リ前三表中各學科目ノ每週教授時數ヲ増減スルノ必要アルトキハ其ノ事由ヲ具シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ每週教授時數ハ三十時ヲ超ユルコトヲ得ス

第十七條 補習科ノ學科目ハ第一條ノ學科目中ニ就キ之ヲ定ムヘシ

補習科ノ各學科目ハ隨意科目ト爲スコトヲ得

第十八條 技藝專修科ノ修業年限ハ二箇年乃至四箇年トス

第十九條 技藝專修科ノ學科目ハ技藝ニ關スル學科目ノ外修身、國語、數學、理科、

圖畫、家事、裁縫、音樂、体操トス

數學、理科、圖書ハ之ヲ缺キ又ハ隨意科目ト爲スコトヲ得

音樂ハ學習困難ナリト認メタル生徒ニハ之ヲ課セサルコトヲ得

技藝ニ關スル學科目ノ種類及各學科目ノ程度ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十條 專攻科ノ修業ハ二箇年又ハ三箇年トス

第二十一條 專攻科ノ學科目及其ノ程度ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十二條 補習科、技藝專修科及專攻科ノ每週教授時數ハ三十時ヲ起ユルコトヲ得ス

第二章 學年、教授日數及式日

第二十三條 高等女學校ノ學年、教授日數及式日ニ關シテハ中學校令施行規則第十六條乃至第十九條ノ規定ヲ準用ス

第三章 編制

第二十四條 高等女學校ノ生徒數、學級ノ編制及教員ノ數ニ關シテハ中學校令施行規則第二條第二十條第一項、第二十一條及第二十四條ノ規定ヲ準用ス

第三十五條 修身、音樂、体操及手藝ハ學年又ハ學級ノ單ナル生徒ヲ合シテ同時ニ之ヲ教授得スルコトヲ得

隨意科目ハ學級ノ異ナル生徒ヲ合シ五十人ヲ超エサル場合ニ限り同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得

第四章 設 備

第二十六條 高等女學校ニ於テハ校地、校舍、体操場及校具ヲ備フヘシ  
道廳府縣立高等女學校ニ於テハ前項ノ外寄宿舎ヲ備フヘシ但シ文部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ備ヘサルコトヲ得

第二十七條 校地、校舍、教室、寄宿舎、校具及住宅ニ關シテハ中學校令施行規則第二十六條、第二十七條、第二十九條乃至第三十一條、第三十三條、第三十五條乃至第三十七條ノ規定ヲ準用ス

第二十八條 校舍ニハ左ノ諸室ヲ備フヘシ

一 通常教室

二 理科、圖畫、裁縫、音樂ノ各特別教室

三 講堂

四 圖書室、器械室、標本室

五 職員室、生徒控所、其ノ他必要ナル諸室

講堂、教室ハ便宜兼用スルコトヲ得

圖書室、器械室、標本室、職員室ハ便宜兼用スルコトヲ得

第二十九條 體操場ハ分テ屋外体操場及室内体操場トス

屋外体操場ハ方形若ハ之ニ類スル形狀ニシテ相當ノ面積ヲ備フヘシ

屋内体操場ハ生徒控所ニ兼用スルコトヲ得

第五章 設置及廢止

第三十條 高等女學校ノ設置及廢止ニ關シテハ中學校令施行規則第三十八條乃至第四十條ノ規定ヲ準用ス

前項ノ外設置ニ關スル申請ニハ修業年限ヲ具スヘシ

第六章 入學、在學退學及懲戒

第三十一條 高等女學校生徒ノ入學、在學、退學及懲戒ニ關シテハ中學校令施行規則第四十一條乃至第四十五條、第四十八條乃至第五十條第一項、第五十一條乃至第五十三條ノ規定ヲ準用ス

第三十二條 他ノ高等女學校ヨリ轉學ヲ志望スル生徒アルトキハ學科程度同一ナル學校ニ限リ試験ヲ行ハヌシテ同一學年ニ編入スルコトヲ得

中學校令施行規則第四十六條第一項及第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス  
第三十三條 各學年ノ課程ノ修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ成績ヲ考查シテ之ヲ

定ムヘシ但シ修身、歴史、地理、理科、家事及教育ニ就キテハ試験ヲ行フコトヲ得  
第三十四條 學校長ハ補習科ヲ修了シ又ハ專攻科、技藝專修科ヲ卒業セテト認メタ  
ル者ニハ修業證書又ハ卒業證書ヲ授與スヘシ

第七章 補則

第三十五條 中學校令施行規則第五十四條乃至第五十六條ノ規定ハ高等女學校ニ關  
シ之ヲ適用ス

第八章 附則

第三十六條 本令ハ明治三十四年四月一日ヨリ施行ス

第三十七條 本令施行ノ際現ニ高等女學校ニ在學スル生徒エ課スヘキ學科、學科目  
及其ノ程度ニ關シテハ其ノ生徒ノ卒業スルニ至ルマテ仍從前ノ例ニ依ルコトヲ得  
第三十八條 明治三十二年文部省令第五號第十四條ノ規定ニ依リ高等女學校ノ生徒  
數ニ關シ文部大臣ニ於テ爲シタル指揮ハ本令ノ規定ニ依リ其効力ヲ失フコトナシ  
第三十九條 本令施行前ニ設置シタル高等女學校ニ於テ校舍及寄宿舎ノ設備ニ關シ  
本令ノ規定ニ依リ難キ事情アルトキハ明治三十五年三月三十日マテハ之ニ依ラ  
サルコトヲ得

第四十條 明治三十二年文部省令第五號及第七號ハ之ヲ廢止ス

勅令第三十三號(明治二十六年五月十七日)

第一條 町村ハ中學校高等女學校又ハ實業學校ヲ設置センカ爲メ町村制第百十六條

第一項ニ依リ町村學校組合ヲ設クルコトヲ得

前項ノ町村學校組合ヲ解カントスルトキハ町村制第百十八條ニ依ル

第二條 前條ノ場合ニ於テ郡長ハ府縣知事ノ指攝ヲ受クヘシ

文部省令第十一號(明治三十四年四月二十日)

師範學校及小學校ヲ除ク外學校ノ名稱ニハ費用負擔ノ區別ニ從ヒ道廳府縣立、郡立  
、市町村立又ハ私立等ノ文字ヲ冠スベシ

既設學校ノ名稱ハ前項ニ依リ本令施行ノ日ヨリ六箇月以内ニ改稱シ當省ヘ開申スヘ  
シ

教科及教科用圖書

○文部省訓令第五號 (明治二十七年五月二十六日)

公私商業學校尋常中學校專修科其他ノ學校ニ於テ生徒ノ商業實習ノ爲ニ紙幣ニ見紛ハシキ裝飾ヲ加ヘタル紙片ヲ用フヘカラス

○文部省告示第五十九號 (明治三十一年十月七日)

師範學校中學校高等女學校教科用圖書ノ檢定ハ自今其圖書ノ組織程度分量記事ノ性質誤謬ノ多少等ニツキ大體ノ調査ヲ爲スニ止ムルモノトス

○文部省訓令第三號 (明治三十一年四月一日)

北海道廳 府縣

中學校及高等女學校教科書ニシテ明治三十二年勅令第二十八號中學校令第十二條第一項但書及同年勅令第三十一號高等女學校令第十三條第一項但書ニ依ルノ必要アルトキハ地方長官ハ該教科書ノ名稱、著作者及發行者ノ氏名、發行年月日、卷冊ノ記號ヲ記載シ文部大臣ニ稟申スヘシ但稟申ノ際該圖書一部ヲ納付セシムルコトアルヘシ

○文部省訓令第六號 (明治三十三年三月二十六日)

北海道廳 府縣

女子ノ師範學校及高等女學校ニ在學スル年紀ハ心身ノ發育上最モ注意ヲ要スル時期ナリ故ニ右等ノ學校ニ在リテハ女生徒卒業ノ成績ハ平素ニ於テ便宜之ヲ調製セシムルコト、シ時期ヲ定メテ一時ニ全學科目ノ試験ヲ行フコト勿カラシムヘシ又月經ノ間ハ其ノ生徒ニ限リ體操科ヲ課セシメサルヲ要ス

設 備

○文部省訓令第四號 (明治三十二年四月六日)

北海道廳 府縣

師範學校中學校及高等女學校建築準則ヲ定ムルコト左ノ如シ自今師範學校中學校及高等女學校ノ校舍寄宿舎等ヲ建築セントスルトキハ特別ノ事情アル場合ヲ除ク外必ス之ニ依ラシムヘク既設ノ校舍寄宿舎等ニシテ此準則ニ牴觸セルモノアルトキハ成ルヘク此準則ニ依リテ改修ヲ爲サシムヘシ

師範學校中學校及高等女學校建築準則

- 一校地ニシテ有毒ナル瓦斯、煤煙、塵埃等ヲ發生スル工場、瘴氣ヲ發生スル處アル沼池、喧噪ナル工場、貸座敷、劇場、寄席、火葬場等ニ接近スルトキハ道德上或ニ衛生上有害ナルヲ以テ成ルヘク遠ク隔離スルコトヲ要ス止ムコトヲ得サル場合ニ於テモ其種類ニ從ヒ少クトモ二町以上ノ距離ヲ存スヘシ
- 一校地ノ面積ハ成ルヘク廣濶ナルコトヲ要シ殊ニ日當リ好ク排水ノ便ヲ有シ乾燥ニシテ健康ニ適スル土地ヲ選ヘシ校地内ニ於ケル體操場ノ位置ハ成ルヘク校舍ノ南方、西南方、東南方若クハ西方ナルコトヲ要ス

- 一校地ヲ選擇スルニ方リ流水裝置ヲ備ヘタル水道ニ依リテ善良ナル水ヲ供給スルコトヲ得ル場合ヲ除ク外ハ豫メ其地ノ水ヲ分析シテ飲料ニ適スルヤ否ヲ檢シ尙ホ其水量ノ多寡ヲ計リ務メテ善良ナル飲料水及雜用水ノ供給ニ注意スヘシ
- 井ニハ堅牢ナル井側ヲ設ケテ汚水ノ浸入ヲ防キ又井蓋ヲ備フヘシ
- 井流シハ土管ノ如キ不浸水物ヲ以テ造リ且排水ニ注意スヘシ
- 井ハ便所、下水、芥棄場等ニ接近セサルコトヲ要ス
- 一校地ノ周圍ニハ樹木ヲ植エ且籬柵等ヲ設クヘシ樹木ヲ植ウルトキハ採光通風ヲ妨ケス又校地ヲ陰鬱ナラシメサル様注意シ落葉樹、常綠樹ヲ交ヘテ栽植シ有毒植物及果樹ノ類ハ之ヲ避クヘシ
- 一二棟以上ノ建物ヲ並列シテ建築スルトキハ其相互ノ距離ハ建物ノ高ト同尺以上タルヘシ
- 一教員室ハ成ルヘク體操場ノ方面ニ設ケ音樂教室ハ成ルヘク他ノ授業ヲ妨ケサル位置ニ設クヘシ
- 一教室ノ過大ナルモノハ視力及音聲ヲ害スルノ虞アルニ依リ幅三間乃至四間長四間乃至五間ト爲スヘシ
- 天井ノ高ハ床面ヲ距ルコト十尺以上トス

床ノ高さ二尺以上トシ床下ノ四方ニ風抜ヲ設クヘシ

教室内ノ壁ハ中性色(灰色淡黄色ノ類)ヲ用フヘシ

寒氣烈シキ地方ニ於テハ窓戸及床板ヲ二重ニシ暖室ノ裝置ヲ爲スコトヲ可トス

一講堂ノ天井ノ高ハ床面ヲ距ルコト十五尺以上トス

一物理及化學及博物(師範學校女子部及高等女學校ニ於テハ理科)ノ特別教室ハ階段席ヲ設ケ平家建ト

爲スヘシ

幅、長及面積ノ割合等ハ通常教室ノ例ニ倣フ

天井ノ高ハ最高階段ヲ距ルコト十尺以上トス

階段席各階段ノ高ハ五寸乃至六寸トス

物理及化學教室(師範學校女子部及高等女學校ニ於テハ理科教室)ニハ暗室ノ裝置ヲ設クヘシ

一採光窓ノ下縁ノ位置ハ床上二尺七寸乃至三尺(疊敷ノ室ニ於テハ此限ニアラス)ニ定メ其上縁ハ

床上九尺以上トシ成ルヘク天井ニ接近セシムヘシ

但採光窓ノ上部ハ欄間ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

採光窓ハ南方、西南方、東南方又ハ西方ニ設ケ且生徒座席ノ左方ヨリ採光スル

コトヲ常例トス

教室ノ左右側ニ於テハ黑板上ニ於ケル光線ノ反射ヲ避ケンカ爲黑板ヲ掲クル壁

ヨリ三尺以内ニ窓ヲ附設スヘカラス

教室及講堂ノ採光窓ノ面積ハ成ルヘク床面積ノ六分ノ一以上タルヘシ

窓ハ生徒座席ノ前面ニ設クヘカラス

採光窓ニハ日光ノ直射ヲ遮蔽センカ爲窓覆ヲ設クヘシ

特ニ完全ナル建築ヲ爲シ得ル場合ヲ除ク外ハ窓ハ引違ノ構造ト爲スコトヲ可ト

ス

一簷又ハ庇ハ光線射入ノ妨トナラサル様注意シテ構造スヘシ

一各室ノ出入口ハ二箇所ヲ設クルコトヲ常例トス

一出入口ノ戸ハ教室ノ面積ヲ縮少セシメ且非常ノ際危険ナカラシメンカ爲引戸

ト爲スカ又ハ外開キト爲シテ扇留ヲ設クヘシ

一廊下ハ幅六尺以上ト爲スヘシ

中廊下ヲ設クルトキハ其教室ナルト寄宿舎ナルトヲ論セス一方ノ室ニ於ケル採

光通風等ヲ妨クルノ虞アルヲ以テ片廊下ト爲スコトヲ要ス但廊下ハ教室ノ主ナ

ル採光窓ノ方面ニ設クヘカラス

ル採光窓ノ方面ニ設クヘカラス

ル採光窓ノ方面ニ設クヘカラス

ル採光窓ノ方面ニ設クヘカラス

一階段ハ幅四尺五寸以上蹴上ケ五寸乃至六寸踏面八寸乃至一尺トシ中間ニ踊場ヲ設ケ且手欄ヲ附スヘシ

二階建ノ校舎ニ於テハ二箇以上ノ階段ヲ設クヘシ

一寄宿舎ノ天井ハ高ハ床面ヲ距ルコト九尺以上トス採光窓、廊下、階段、出入口ニ關スル事項ハ教室ノ例ニ依ルヘシ

一病室ハ成ルヘク別棟建テ爲シ患者ノ療養ニ便利ナル構造ト爲スヘシ

一師範學校女子部、中學校及高等女學校ニ於テ自修室及寢室ヲ兼用スルトキハ相當ノ容積ヲ增加スヘシ

一校舎及寄宿舎ニ設クヘキ便所ハ本舎ト隔離シ空氣ノ流通ニ注意シ其周圍ニハ屏牆ヲ設ケ且松、杉等ノ樹木ヲ植エ臭氣ノ舍室内ニ入ルコトヲ防クヘシ

大便所ハ天井ヲ設ケス戸ハ上下ヲ透カシテ右開キト爲スコトヲ可トス

小便所ニハ高六寸乃至八寸幅一尺以上ノ踏石ヲ設クヘシ

便所ハ校舎ニ存リテハ生徒四十人ニ付大便所一箇所小便所二箇所

〔師範學校女子部及高等女學校ニ於テハ生徒十人ニ付便所一箇所〕ヲ設クヘシ

一机腰掛ハ一人掛若クハ二人掛ト爲シ別表ノ標準ニ依リ生徒ノ身長ニ適應シタルモノヲ用フヘシ

生徒用机腰掛寸法表

項目	番	號			
		一	二	三	
身	長	三〇、〇—三四、〇	四〇、〇—四五、〇	五〇、〇—五五、〇	
		(四二、九—四六、二)	(四九、二—四九、五)	(四九、五—五三、五)	
		二〇、〇	二二、五	二四、〇	
机	高	二二、〇	二二、五	二四、〇	
		幅	二三、〇	二三、〇	二三、〇
			長	二〇、〇	二〇、〇
腰掛	高	一一、〇	一一、八	一四、〇	
		幅	一〇、六	一一、四	一二、〇
			長	一四、〇	一四、〇
倚用男	横木ノ高	六、二	六、六	八、〇—九、〇	



靠 用子	第一橫木ノ高	五、三	五、六	七、五
	第二橫木ノ高	一四、四	一三、二	一五〇、〇

備考 寸法ハ身長欄ハ「センチメートル」同欄括弧内ノ數字及其他ハ曲尺ノ寸ヲ以テ一位トス

職員名稱待遇

勅令第二百四十四號 (明治二十四年十二月十二日)

公立中學校高等女學校專門學校實業學校職員名稱待遇及任免

第一條 公立中學校高等女學校專門學校實業學校職員ノ名稱左ノ如シ

學校長

教諭

助教諭

舍 監 寄宿舎ノ設アル學校ニ限ル

書記

第二條 學校長助教諭助教諭舍監書記ハ判任文官ト同一ノ待遇ヲ受ク但シ學校ノ等位種類等ニ依リ學校長及教諭三名以内ハ特ニ奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受ケシムルコトアルヘシ

學校長ヨリ兼任スル教諭ハ前項定員ノ外トス

第三條 奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル職員ノ任免ハ文部大臣之ヲ奏薦宣行シ判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ハ府縣知事之ヲ專行ス

勅令第二十二號 (明治二十六年四月十七日)

明治二十四年勅令第二百十七號師範學校官制第二條但書及明治廿四年勅令第二百四十四號公立中學校高等女學校專門學校商業學校職員名稱待遇及任免ニ關スル勅令第二條ニ依リ奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル各學校職員ノ任免奏薦及宣行ハ明治二十五勅令第九十六號高等官等官等俸給令第四條及第五條ノ例ニ依依ル

○勅令第四百一十一號 (明治二十七年八月八日)

第二條 學校編制ノ變更事務ノ伸縮等ニ依リ其人ヲ要セサル場合其他傷痍疾病等ノ事故アル場合ニ於テハ地方長官ハ公立學校職員ニ休職ヲ命スルコトヲ得豫備後備ノ軍籍ニ在ル公立學校職員戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキハ當然休職ヲ命セラレタルモノトス

第一項ニ依ル休職期限ハ一箇年トシ第二項ニ依ル休職ノ期限ハ其ノ事故止ミタル後尙三ヶ月トス

第二條 休職ノ期限滿ツルトキハ當然退職者トス

第三條 休職者ハ職務ニ從事セス及俸給ヲ減セラレ又ハ全ク之ヲ受ケサルノ外總テ本職者ト異ルコトナシ

附 則

第四條 本令ハ市町村立小學校教員ニ適用セス

第五條 明治二十七年六月五日以後本令施行以前ニ召集セラレタル者ハ其ノ召集ノ日ヨリ休職ヲ命セラレタルモノトス

○勅令第三百四十九號 (明治三十二年七月十五日)

小學校ニ非サル公立學校ノ職員ニシテ奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ノ懲戒ニハ文官懲戒令中高等官ニ關スル規定ヲ準用シ判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ノ懲戒ニハ文官懲戒令中判任官ニ關スル規定ヲ準備ス

附 則

本令は明治三十二年七月二十日ヨリ施行ス

### 教員資格

勅令第三百二十四號 (明治三十三年三月三十日)

#### 教員免許令

- 第一條 特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外教員免許狀ヲ授與スルハ本令ノ定ムル所ニ依ル
- 第二條 特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外本令ニ依リ免許狀ヲ有スル者ニ非サレバ教員タルコトヲ得ス但シ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ教員ニ充ツルコトヲ得
- 第三條 教員免許狀ハ教員養成ノ目的ヲ以テ設置シタル官立學校ノ卒業者又ハ教員檢定ニ合格シタル者ニ文部大臣之ヲ授與ス
- 第四條 教員檢定ハ試験檢定及無試験檢定トシ教員檢定委員之ヲ行フ
- 第五條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ教員檢定ヲ受クルコトヲ得ス
  - 一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス
  - 二 信用若ハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シテ罰金ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタル者

三 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限リノ處分ヲ受ケ債務ノ辨償ヲ終ヘサル者

- 第六條 教員檢定ヲ出願スル者ハ手数料トシテ一學科目毎ニ金參圓ヲ納付スヘシ
- 第七條 教員檢定ニ關スル規程ハ文部大臣之ヲ定ム
- 第八條 教員免許狀ヲ受ケタル者ノ氏名族籍及免許ノ學科ハ官報ヲ以テ之ヲ公告ス
- 第九條 教員免許狀ヲ有スル者其ノ氏名族籍ヲ變更シ又ハ免許狀ヲ毀損亡失シタルトキハ其ノ事由ヲ記シ免許狀ノ書換若ハ再渡ヲ文部大臣ニ出願スルコトヲ得
- 前項ニ依リ免許狀ノ書換若ハ再渡ヲ出願スル者ハ手数料金壹圓ヲ納付スヘシ
- 第十條 教員免許狀ヲ有スル者第五條各號ノ一ニ該當シタルトキハ免許狀ハ其ノ效力ヲ失フ
- 第十二條 教員免許狀ヲ有スル者不正ノ所爲其ノ他教員タルヘキ體面ヲ汚辱スルノ所爲アリテ其ノ情狀重シト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ免許狀ヲ褫奪ス
- 第十二條 本令ニ依リ納付スヘキ手数料ハ收入印紙ヲ用キ之ヲ願書ニ貼付スヘシ其ノ既ニ納メタル後ハ何等ノ事情アルモ之ヲ還付セス

#### 附 則

第十三條 本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十四條 本令施行前文部大臣ニ於テ授與シタル師範學校、中學校、高等女學校ノ教員免許狀及舊東京師範學校ニ於テ授與シタル中學師範學科卒業證書ハ本令ニ依リ授與シタル教員免許狀ト同一ノ効力ヲ有ス

○文部省令第十號 (明治三十三年六月一日)

明治三十三年勅令第三百三十四號教員免許令第七條ニ基キ教員檢定ニ關スル規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

教員檢定ニ關スル規程

第一條 教員檢定ハ受檢人ノ學力、品行、身體ニ就キ教員タルニ堪能ナルヤ否ヤヲ檢定スルモノトス

第二條 檢定ヲ爲スヘキ學科目左ノ如シ

- 修身 教育 國語及漢文 英語 佛語 獨語 歷史 地理 數學 物理及化學
  - 博物 法制及經濟 習字 圖書 家事及裁縫 體操 音樂 簿記 農業 商業
  - 手工 手藝
- 歷史ハ日本史東洋史、西洋史ノ二部ニ數學ハ算術代數幾何、三角法、解折幾何微分積分ノ四部ニ物理及化學ハ物理、化學ノ二部ニ博物ハ動物及生理、植物、礦物ノ三部ニ圖書ハ毛筆書用器書、鉛筆書用器書ノ二部ニ家事及裁縫ハ家事、裁縫ノ

二部ニ分テ檢定ヲ出願スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ一學科目ノ一部若ハ數部ノ檢定ヲ出願スルモ其ノ手數料ニ關シテハ一學科ト看做ス

三角法ハ算術代數幾何ニ解折幾何ハ三角法ニ微分積分ハ解折幾何ニ合格シタル上ニアラサレハ檢定ヲ行ハス

第三條 試驗檢定ハ每年少クトモ一回之ヲ行ヒ無試驗檢定ハ隨時之ヲ行フ

試驗檢定ノ出願期限、試驗ヲ爲スヘキ學科目及試驗施行ノ期日ハ豫メ之ヲ告示ス第四條 檢定ヲ受ケムトスル者ハ氏名、族籍、住所、生年月及教員タラムト欲スル學校ノ種類、學科目ヲ記シタル願書(一號書式)ニ左ノ書類ヲ添ヘ試驗檢定ニ在リテハ地方廳ヲ經由シ無試驗檢定ニ在リテハ地方廳若ハ當該學校ヲ經由シ文部大臣ニ出願スヘシ

- 一 學業、業務、賞罰等ニ關スル履歷書(二號書式)及學業證書若ハ教員免許狀ノ寫
- 二 學校醫ノ身體檢查書(三號書式)但シ學校醫ノ設置ナキ地ニ在リテハ明治三十一年文部省令第七號第一條若ハ第二條ニ該當スル資格アル醫師ノ檢查書ヲ以テスルモ妨ケナシ

地方長官又ハ當該學校長ハ本人ノ品行ニ就キ檢定願書ニ添ヘ其ノ意見ヲ附記スルコトヲ要ス

第五條 左ニ掲クル者ハ無試験檢定ヲ受クルコトヲ得

- 一 文部大臣ノ指定シタル學校ノ卒業者及選科修了者
- 二 師範學校、中學校、高等女學校ノ卒業證書ヲ有シ更ニ卒業生ノ教員免許資格ニ關シ文部大臣ノ許可ヲ受ケタル公立、私立學校ニ入り三學年以上在學シテ卒業シタル者但シ修業年限五箇年ノ高等女學校ノ卒業證書ヲ有スル者ノ在學スヘキ年數ハ二學年以上トス
- 三 師範學校、中學校、高等女學校、及之ト同等以上ノ學校ノ卒業證書ヲ有シ更ニ外國ノ大學校若ハ之ニ準スヘキ學校ニ於テ修學シ學位若ハ卒業證書ヲ受領シタル者
- 四 外國ニ於テ師範學校、中學校、高等女學校ニ準スヘキ學校ヲ卒業シ更ニ大學校若ハ之ニ準スヘキ學校ニ入り修學シ學位若ハ卒業證書ヲ受領シタル者
- 五 教員タラント欲スル學校ノ學科程度ト同等以上ノ學校ノ教員免許狀ヲ有スル者

第六條 削除

第七條 試験ヲ分チテ豫備試験及本試験トス但シ學科目ノ種類ニ依リ豫備試験ヲ行ハサルコトアルヘシ

豫備試験ヲ施行スル學科目ニ在リテハ豫備試験ニ合格シタル者ニアラザレハ本試験ヲ受クルコトヲ得ス

第八條 試験ハ受験人出願ノ學科目ニ就キ其ノ教員タラムト欲スル學校ノ學科目ヲ教授スルニ足ルヘキ程度ヲ標準トシ教授法ヲ併セテ之ヲ行フモノトス

第九條 豫備試験ハ願書經由ノ地方廳所在地ニ於テ之ヲ行フ

本試験ヲ行フ場所ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第十條 左ニ掲クル者ニシテ體操科ノ試験檢定ヲ出願シタルトキハ兵式體操ノ部分ヲ省ク

一 陸軍歩兵科士官

二 陸軍歩兵科下士任官後滿四年以上現役ニ服シタルモノ

第十一條 削除

第十二條 不正ノ方法ニ依リ試験ヲ受ケムト企テタル者及試験ニ關スル規程ニ違背シタル者ハ試験ヲ受クルコトヲ得ス

檢定ニ合格シタル後前項ノ事實發覺シタルトキハ其ノ合格ヲ無効トスルコトアルヘシ

附 則

第十三條 削除

第十四條 明治三十二年文部省令第二十五號第二條第一項ノ許可ヲ受ケタル公立、

私立學校ハ本令第五條第一項第二號ノ許可ヲ受ケタルモノト看做ス

第十五條 従前ノ規定ニ依リ認めラレタル豫備試験ノ合格並ニ証明書ノ効力ハ仍其ノ有効期間存続ス

一號書式(用紙美濃紙)

教員檢定願

消印

收入印紙

住所族籍

氏名

生年月

何學科 何學科

何學科

私儀師範學校(中學校) (女子師範學校師) (高等女學校) 教員志願ニ候間前記ノ學科

ニ就キ試験檢定(無試験檢定) 相受度別紙履歷書並ニ醫師身體檢査書相添へ此段相

願候也

年 月 日

右

何 某印

文部大臣何某殿

第二號書式(用紙美濃紙)

履 書 歷

氏 名

生 年 月

學 業

一年月日何學校ニ入學年月日何科卒業(證書寫別紙ノ通)

一年月日何々ニヨリ何免許狀ヲ受ク(免許狀寫別紙ノ通)

業 務

一年月日何官職拜命又ハ何業ニ従事年月日依願免官或ハ廢業又ハ現今在職従事等

賞 罰

一年月日何所ニ於テ何々ニ付キ何賞ヲ受ク或ハ何罰ヲ受ク  
右之通相達無之候也

年月日

右

何

某印

第三號書式〔用紙美濃紙記載方ハ別記身體  
〔檢查書記載方心得ニ依ルヘシ〕  
身體檢查書

族籍

何

生年月

某

一 體格

一 身長

一 體重

一 胸圍

一 中心視力

一 色盲

一 眼病

一 聽力

一 耳疾

一 呼吸器

一 神經系

一 皮膚

一 言語

一 既往現在ノ疾病又ハ畸形

右檢查候處相違之無候也

年月日 自檢查

住所

何學校醫

學位 若ハ 資格 何

某印

別記

身體檢查書記載方心得

一 檢查ノ表記及身長體重胸圍聽力等ノ檢查方法ハ明治三十三年文部省令第四號學

生徒身體檢查規程ニ準スヘシ

- 一 體格ノ強健ト稱スルモノハ發育營養佛ニ佳良ニシテ其ノ身長(センチメートル)ヲ以テ體重(キログラム)ヲ除シタル商〇、三二以上且無病ノ者ヲ指ス
- 一 (尪)ヲ除シタル商〇、二六以上且無病ノ者ヲ指ス
- 一 中等ト稱スルハ發育營養共ニ通常ニシテ其ノ身長(センチメートル)ヲ以テ體重(キログラム)ヲ除シタル商〇、二六以上且無病ノ者ヲ指ス
- 一 薄弱ト稱スルハ發育營養共ニ不十分ナルカ或ハ身長(センチメートル)ヲ以テ體重(キログラム)ヲ除シタル商〇、二六未滿ナルカ或ハ強度ノ背柱彎曲、扁平胸、狭小胸若ハ全身ノ健康ニ直接ノ關係アル慢性ノ疾患アル者ヲ指ス
- 一 中心視力ハヌネレン氏ノ試視力表ニ依リテ其ノ記載方ハ30/60ト記スヘシ
- 一 但シ遠視若ハ近視ニアリテハ二十尺ノ距離ニ於テ二十號ヲ明視シ得ル眼鏡ノ度ヲ記載スヘシ
- 一 色盲ハ其ノ有無、若シ其ノ患アル者ハ何色盲ト記載スヘシ
- 一 呼吸器ハ理學的診斷ノ成績ヲ記載スヘシ
- 一 神經系ハ中樞若ハ末梢神經ニ障家ノ有無ヲ記載スヘシ
- 一 皮膚ハ主トシテ傳染症皮膚病ノ有無ヲ記載スヘシ若シ顔面等ニ現ハレタル皮膚病アルトキハ之ヲモ記載スヘシ

一言語ハ明瞭、吃、嘔吐等ヲ記載スヘシ

一 既往現在ノ疾病又ハ畸形ハ腦病、肺病、肋膜炎、脚氣等ノ曾患、肺病、心臟病、胃腸病等ノ現在及顯著ナル畸形ヲ記載スヘシ

○文部省告示第百五十三號 (明治三十三年六月一日)

明治三十三年文部省令第十號教員檢定ニ關スル規程第五條第一項第一號ニ依リ指定スルコト左ノ如シ

- 帝國大學分科大學卒業生
- 元東京大學卒業生
- 元工部大學卒業生
- 帝國大學分科大學選科修了生
- 帝國大學文科大學元古典講習科卒業生
- 帝國大學理科大學元簡易講習科卒業生
- 帝國大學農科大學實科卒業生
- 帝國大學農科大學乙科優等卒業生
- 高等學校卒業生
- 元高等中學校卒業生



- 札幌農學校卒業生
- 元駒場農學校卒業生
- 元東京農林學校卒業生
- 農業教員農成所卒業生
- 高等商業學校卒業生
- 元東京商業學校卒業生
- 商業教員養成所卒業生
- 東京工業學校卒業生
- 元東京職工學校卒業生
- 工業教員養成所卒業生
- 東京美術學校卒業生
- 東京音樂學校卒業生
- 元高等師範學校附屬音樂學校卒業生
- 元東京音樂學校卒業生
- 東京外國語學校卒業生
- 學習院高等學科大學科卒業生

私立日本體育會体操學校高等本科卒業生

○文部省令第二十五號 (明治三十一年四月五日)

第一條 師範學校中學校高等女學校ノ卒業證書ヲ有シ更ニ第二條第一項ノ許可ヲ受ケタル公立私立學校ニ入り三學年以上在學シテ卒業シタル者ハ明治二十九年文部省令第十二號師範學校中學校高等女學校教員免許規則第十條第一項第一號ニ掲クル學校ノ卒業生ト同一ノ取扱ヲ爲ス但修業年限三箇年ノ高等女學校ノ卒業證書ヲ有スル者ノ在學スヘキ年數ハ二學年以上トス

第二條 公立私立學校ニシテ其卒業生ニ關シ第一條ノ取扱ヲ受ケントスルモノハ公立學校ニアリテハ其管理者ニ於テ私立學校ニアリテハ其設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

- 一 試驗ヲ須スシテ教員免許狀ヲ受クヘキ見込ノ學科目
- 二 學 則
- 三 校地校舍寄宿舍圖面
- 四 教科書及參考書目錄
- 五 教授器械及標本目錄
- 六 教員履歷書受持學科及專任兼任ノ區別ヲ記シタル調書

七 一箇年ノ經費收入支出金額及其細目

前項ノ學校ハ左ノ要件ヲ具備スルモノタルヘシ

一 前項第一號ノ學科目ハ高等師範學校女子高等師範學校ノ當該科目ト同等以上ノ程度ニシテ別ニ相當ノ補助科目ヲ具フルコト

二 學科ヲ教授スルニ足ルヘキ教員其他ノ設備アルコト

三 維持ノ方法確實ナルコト

第三條 第一條ノ取扱ヲ受クル學校ニ於テ卒業試驗ヲ施行スルトキハ公立學校ニア

リテハ其管理者ニ於テ私立學校ニアリテハ其設立者ニ於テ試驗ノ期日及生徒中師範學校中學校高等女學校ノ卒業證書ヲ有スル者ノ數ヲ具シ三十日前ニ文部大臣ニ開申スヘシ

第四條 文部大臣ハ師範學校中學校高等女學校檢定委員又ハ其他ノ吏員ヲ派遣シテ

卒業試驗ニ立會ヲ爲サシム但委員又ハ吏員ハ試驗問題及答案ヲ查閱シ試驗場ニ參列ス前項ノ委員又ハ其他ノ吏員ニ於テ試驗問題又ハ試驗ノ方法不適當ト認ムルトキハ之ヲ變更シ又ハ變更セシムルコトアルヘシ

第五條 學校長ハ卒業試驗合格者ノ籍族氏名生年月及許可ヲ受ケタル學科點數ヲ具シ試驗後遲滯ナク文部大臣ニ開申スヘシ

第六條 卒業試驗合格者中各學年ヲ通シテ總授業時數ノ四分之一以上授業ヲ受ケサル

者ハ卒業試驗ニ於テ合格スルモ第一條ノ取扱ヲ爲スノ限ニアラス

第七條 第二條第一項ノ許可ヲ受ケタル學校ニ於テ學則ヲ變更シ又ハ校地校舍寄宿舎ヲ變更セントスルトキハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第八條 第二條第一項ノ許可ヲ受ケタル學校ニ於テ第二條第一項第四號前段又ハ第

六號ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキハ其都度文部大臣ニ開申スヘシ

第九條 第二條第一項ノ許可ヲ受ケタル學校ニ於テ師範學校中學校高等女學校卒業生ノ入學ヲ許可セントスルトキハ願書ニ左ノ書類ヲ添付セシムルコトヲ要ス

一 履歷書

二 卒業試驗點數及品行ニ關スル當該學校長ノ證明書

師範學校卒業生ニアリテハ前項各號ノ外服務義務終了ニ關スル地方長官ノ證明書ヲ添付セシムルコトヲ要ス

第十條 第二條第一項ノ許可ヲ受ケタル學校ニ於テ左ノ表簿ヲ備ヘ永久ニ保存スヘシ

一 其學校ニ關係アル官廳ノ令達及往復書類

二 學則

- 三 日課表各教員受持學科及時間表教科書配當表
- 四 職員名簿及履歷書
- 五 生徒學籍簿
- 六 學年試驗問題答案及成績表
- 七 職員出勤籍生徒每時出席簿
- 八 資產原簿出納簿及經費ノ豫算決算ニ關スル帳簿
- 九 圖書器械器具藥品標本目錄
- 十 生徒諸願屆  
生徒學籍簿ニハ生徒ノ族籍氏名住所生年月日入學及卒業ノ年月日入學前ノ學歷等ヲ記載スヘシ
- 第十一條 第二條第一項ノ許可ヲ受ケタル學校ニシテ此規則ニ違背シタルトキ又ハ第二條第二項ノ要件ノ一ヲ失ヒタルトキハ文部大臣ハ將來ニ向ヒテ其許可ヲ取消スコトアルヘシ
- 第十二條 師範學校中學校高等女學校ノ卒業證書ヲ有シ更ニ外國ノ大學校ニ於テ修學シ學位ヲ受領シタル者ハ明治二十九年文部省令第十二號師範學校中學校高等女學校教員免許規則第十條第一項第一號ニ掲ケル學校ノ卒業生ト同一ノ取扱ヲ爲ス

コトアルヘシ

第十三條 本令中師範學校ノ卒業證書トアルハ師範學校簡易科ノ卒業證書ヲ包含セ

○公立私立學校外國大學校卒業生ノ教員免許ニ關スル規定第一條ノ取扱ヲ受クル學校(明治三十二年八月三十一日現在)

道廳府縣	設立別	學 校 名	免許狀ヲ授與セラルヘキ學科	許 可 年 月 日
東 京	私 立	東京專門學校文學部	修身 倫理 教育 國語 漢文 歷史 地誌 英文	明治三十二年七月七日
	私 立	哲學館教育部修身倫理漢文	漢文	同 年 七月十日
	私 立	國語院	國語 歷史	同 年 七月廿七日

○文部省令第十五號 (明治三十三年九月六日)  
 明治三十三年勅令第三百三十四號教員免許令第二條但書ニ依リ教員免許狀ヲ有セザル者ヲ以テ教員ニ充ツルコトヲ得ルノ件左ノ通相定ム  
 第一條 師範學校中學校ニ於テ教員免許狀ヲ有スル者ヲ得難キ場合及高等女學校ニ

於テ教員免許狀又ハ第二條ノ資格ヲ有スル者ヲ得難キ場合ニハ教員免許狀ヲ有セサル者ヲ教員ニ採用スルコトヲ得

第二條 高等女學校ニ於テ第二學年以下ノ教授ヲ擔任セシムル爲小學校本科正教員免許狀ヲ有スル者ヲ採用スルコトヲ得

第三條 第一條ニ依リ採用シタル教員ハ公立學校ニ在リテハ教諭助教諭又ハ訓導ト稱スルコトヲ得ス

第四條 中學校高等女學校ニ於テ新ニ採用セントスル者ヲ加算シ教員免許狀ヲ有セサル者ノ數教員免許狀ヲ有スル者ノ二倍ヲ超過スル場合ニハ文部大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

前項ノ規定ニ依リ認可ヲ受ケントスルトキハ公立學校ニ在リテハ管理者、私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ本人ノ氏名履歷及分擔學科並當該學校現在教員ノ氏名及資格ヲ記載シタル書類ヲ添附スヘシ

第五條 第一條ニ掲ケタル學校及特別ノ規定アル學校ヲ除ク外公立學校ニ於テハ教員免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ教員ニ充ツルコトヲ得

附 則

第六條 本令ハ明治三十三年九月十日ヨリ施行ス

第七條 本令施行ノ際教員免許ヲ有セスシテ第一條ノ教授ニ從事スル者ハ本令ノ規定ニ依リ採用セラレタル者ト看做ス

第八條 明治三十年文部省令第十九號第七條明治三十二年文部省令第二十二號同第四十三號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○文部省告示第七十一號（明治三十四年三月三十日）

中學校倫理科教員免許狀ハ明治三十四年四月一日以後中學校修身科教員免許狀ト同一ノ効力ヲ有ス

職員恩給

○法律第九十一號 (明治二十三年十月二日)

府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

第一條 府縣立師範學校長ノ俸給ハ國庫負擔トス

第二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第三條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス  
一 年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ

二 傷疾ヲ受ケ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ  
三 廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニヨリ退職ヲ命シタルトキ

第四條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

一 職務ニ依リ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ

堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第五條 官吏恩給法第五條第一項第四項第五項第六條及第十一條及第十二條第一項ハ退隱料ニ適用ス

第六條 退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其時間退隱料ノ支給ヲ停止ス

一 公務ニ就キ退隱現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二 公權ヲ停止セラレタルトキ  
第八條 年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第九條 府縣立師範學校公立中學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第四條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ俸給四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第十條 在職滿一年以上ニシテ退職シタル府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ニハ退職現時ノ俸給半ヶ月分ヲ在職年數ノ一ケ年ニ當テ其年數ニ

應スル金額ヲ一時給與ス但非職又ハ休職滿期ニ依リ退職シタル者ハ本職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給與ス

第三條第四條又ハ第九條ニ依リ退隱料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ前項ノ限ニ在ラス

本條ノ退職給與金ヲ受ケタル者他日府縣立師範學校公立中學校長正教員舍監及書記ニ再任シ再役退職シタルトキハ第一項ノ在職年數ハ其再任ノ月ヨリ起算ス

本條ノ給與及之ニ關スル費用ハ退職者ノ退職ノ際勤務セシ學校所在府縣郡市町村ノ負擔トス

第十一條 退隱料ノ支給ハ府縣知事ノ証明ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス  
官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ  
二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ  
三 退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十三條 官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母

祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戶籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ廢疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十四條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ニシテ在職十五年未滿ノ者在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ニ就キテハ官吏遺族扶助法第十七條第二項ヲ適用ス

第十五條 扶助料及扶助金ノ支給並第十三條第二項ノ給與ハ府縣知事ノ申牒ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

第十六條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ハ其俸給百分ノ一ヲ毎年國庫ヘ納ムヘシ

府縣郡市町村ハ其府縣立師範學校及公立中學校長正教員舍監及書記ノ俸給百分ノ一二當ル金員ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

兼職ニ係ル加俸ニ對シテハ本條ノ納金ヲ要セス

第十七條 退隱料扶助料扶助金及第十三條第二項ノ給與並其支給ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス  
退隱料扶助料扶助金等ノ支給ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十八條 削除

第十九條 削除

第二十條 此法律第一條ハ明治二十五年ヨリ第二條乃至第十九條ハ明治二十六年  
一 度ヨリ之ヲ施行ス

第二十一條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對  
シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

(備考) 明治三十二年法律第九十號ヲ以テ改正ノ條項ハ明治三十二年四月一日ヨリ  
施行ス

勅令第九十六號 (明治三十二年五月十六日)

第一條 府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於テ府縣立  
師範學校及公立中學校ノ正教員トアルハ教諭助教諭訓導トシ准教員トアルハ其ノ  
他ノ教員トス

第二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ノ在職年數ハ就職  
ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

明治十四年六月以前ヨリ在職ノ者ハ同年同月ヨリ起算ス  
府縣立師範學校長非職又ハ休職中ノ年數及月數并府縣立師範學校長補在職中ノ年

數及月數ハ在職年數ニ算入スヘシ公立中學校長并府縣立師範學校及公立中學校ノ  
正教員舍監書記休職中ノ年數及月數亦同シ

第三條 左ニ掲タル年數及月數ハ在職年數ヨリ除算スヘシ

一 自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若ハ失職ニ該當シタル者  
再就職シタルトキハ其ノ前在職ノ年數及月數

二 恩給若ハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ府縣立師範學校及公立中學校ノ  
學校長正教員舍監書記ヲ兼ヌルトキハ其ノ兼職中ノ年數及月數

三 府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十九條ニ依ル  
退隱料ヲ受クル者ハ其退隱料ヲ受クヘキ事由ノ生シタル前ノ在職年數及月數

○文部省第一號 (明治二十五年二月十日)

明治二十三年(十月)法律第九十一號府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及  
遺族扶助料法第十七條ニ基キ公立學校職員退隱料及遺族扶助料法支給規則ヲ定ムル  
コト左ノ如シ

公立學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則

第一章 退隱料ノ請求

第一條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第三條第四條

第五條第九條ニ依リ退隱料ヲ受クヘキ者ニ退隱料請求書ヲ作り退職ノ際勤務セシ  
學校所屬府縣知事ニ差出スヘシ郡市町村ノ設立ニ係ル學校ノ職員ニ在テハ其所屬  
郡市町村長ヲ經由スヘシ

第二條 退隱料請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ  
一 在職中ノ履歷書

二 戶籍吏ノ作りタル戶籍謄本書但府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料  
及遺族扶助料法第九條ニ掲ケタル者ハ之ヲ要セス

第三條 職務ニ依リ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ退隱料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲ケ  
ル書類ノ外尙左ノ書類ヲ添付スヘシ官吏恩給法第六條ヲ適用スヘキ者亦同シ

一 現認證書若クハ事實ヲ證スル公文ノ寫又ハ口供書  
二 醫師ノ診斷書

第四條 退隱料請求書ヲ受ケタル府縣知事ニ查覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキ  
ハ退隱料年額計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ文部大臣ニ差出スヘシ

府縣知事ニ於テ請求ノ理由ナシト認ルルキハ意見ヲ具メ之ヲ文部大臣ニ差出スヘシ  
第五條 文部大臣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ退隱料證書ヲ作り府縣知事  
ヲシテ之ヲ本人ニ交付セシム但退隱料増加ノ爲更ニ退隱料證書ヲ交付スルトキハ

前ニ交付シタル證書ヲ返納セシム

第六條 削除

第七條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十條第一項  
ニ依リ給與金ヲ受クヘキ者ハ給與金請求書ヲ作り在職中ノ履歷書ヲ添付シ退職ノ  
際勤務セシ學校所屬府縣知事ニ差出スヘシ

前項ノ場合ニ於テ郡市町村ノ設立ニ係ル學校ノ職員ニアリテハ其所屬郡市町村長  
ヲ經由スヘシ

府縣知事ニ於テ本條第一項ノ請求ヲ許可シタルトキハ辭令書ヲ作り之ヲ本人ニ交  
付スヘシ

第二章 扶助料ノ請求

第八條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十二條第十  
三條第一項第十四條ニ依リ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者ハ扶助料請求書又ハ扶  
助金請求書ヲ作り親族二名親族ナキトキハ近隣ノ戶主二名連署シ市町村長ノ證明  
ヲ經退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ死者ノ最終勤務セシ學校所  
屬府縣知事ニ退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族又ハ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ニ  
在テハ居住地ノ府縣知事ニ差出スヘシ



府縣知事市町村長ハ其所屬公立學校職員遺族ノ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者  
アル者ハ扶助料又ハ扶助金ノ請求上必要ノ書類ヲ遺族ニ交付スヘシ  
第九條 扶助料請求書又ハ扶助金請求書ニハ戶籍吏ノ作リタル戶籍謄本及左ノ書類  
ヲ添付スヘシ

一 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十二第一第二  
第十四條ニ當ル者ノ請求書ニハ府縣知事ヨリ交付シタル死者ノ履歷書  
二 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十二條第三ニ  
當ル者ノ請求書ニハ死者ノ退隱料證書

三 官吏遺族扶助法第四條第二項ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ傷痰若クハ疾病ノ  
職務ニ起因シタル證據書類醫師ヲシテ診察セシメタルトキハ其診斷書及退隱  
料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死  
去シタル者ノ遺族ニアツテハ本條第二ノ書類

四 扶助料ヲ受クル者死去シ又ハ權利消滅シタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ  
者ノ請求書ニハ前者ノ扶助料證書  
五 公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ確定裁判ノ宣  
告書寫

六 官吏遺族扶助法第十五條ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ其事由ヲ詳記シタル書

類醫師ノ診斷書及退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第一  
ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第二ノ書類公務ニ起因  
スル傷痰若クハ疾病ニ依リ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第三ノ書類扶助  
料ノ轉給ヲ受クヘキ孤兒ニ在テハ本條第四ノ書類

第十條 扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ受ケタル府縣知事ハ査覈ノ上扶助料年額  
計算書又ハ扶助金計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ文部大臣ニ差出スヘシ  
文部大臣ニ於テ前項ノ請求ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作り府縣知事ヲシテ  
之ヲ本人ニ交付セシム扶助金ニ係ルモノハ辭令書ヲ用フ

第十一條 削除

第十二條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十三條第二  
項ニ掲ケタル給與金ノ請求等ハ扶助金ノ例ニ依リ但癡疾若クハ不具ニシテ產業ヲ  
營ムコト能ハサル者ノ請求書ニハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第三章 退隱料扶助料ノ支給及停止

第十三條 退隱料支給ノ期ハ退職ノ翌月ヨリ始マリ死去ノ月ヲ以テ終ルモノトス  
退隱料又ハ其扶助料ハ年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ本人

居住地ノ府縣知事ヲ經テ支給ス但權利消滅ノトキ及給與金扶助金ハ期月ニ拘ラヌ之ヲ支給ス

第十四條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ退隱證書又ハ扶助料證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第十五條 退隱料ヲ受クヘキ權利消滅シ若クハ停止セララルヘキ者ノ支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 公務ニ就キ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキハ其給料ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ停メ其給料ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ニ處セラレ若クハ監視ニ付セララルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

第十六條 扶助料支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

一 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セララルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

三 公權停止中轉給ヲ受クヘキ者ノ支給ハ本人停止ノ翌日ヲ以テ始メ復給ノ前日ヲ以テ終ル

第十七條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第四條ニ掲ケタル増加退隱料ノ等差ハ左ノ如シ

第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七

第二項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ六

第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年太政官達第十六號文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第十八條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者他ノ府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ從來

居住地ノ府縣知事及轉籍若クハ寄留シタル地ノ府縣知事ニ届出ヘシ

府縣知事ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ甲乙兩廳間互ニ其者ニ係ル退隱料等支給方ノ受繼ヲ爲シ之ヲ文部大臣ニ報告スヘシ

第十九條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ又ハ公權ヲ停止セラレタルトキハ本籍市町村長ヨリ退隱料又ハ扶助料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ報告スヘシ

第二十條 退隱料ヲ受クル者公務ニ就キタルトキハ其所屬主長ヨリ退隱料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ報告スヘシ解職シタルトキハ亦同シ其有給者ニ係ル報告書ニハ給料額及給料ノ支給ヲ始ムル日解職ノトキハ支給ヲ終リタル日ヲ附記スヘシ給料額ニ増減ヲ生シタルトキハ其時々之ヲ報告スヘシ

第二十一條 府縣知事ニ於テ第十九條第二十條ノ報告ヲ受ケタルトキハ退隱料又ハ扶助料ノ交付ヲ止メ之ヲ文部大臣ニ報告スヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ者又ハ其轉給ヲ受クヘキ者ナキトキ又ハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失ヒ若クハ扶助料ノ支給ヲ廢スヘキ者一係ルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ收メテ之ヲ文部大臣ニ納付スヘシ

第四章 雜 則

第二十二條 府縣知事ハ第五條又ハ第十條ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ本人ニ交付スルト同時ニ之ヲ本籍市町村長ニ通知スヘシ

第二十三條 水火災盜難等ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ市町村長ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ届出ヘシ

府縣知事ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ文部大臣ニ申出シ文部大臣ハ退隱料證書又ハ扶助料證書謄本ヲ作り府縣知事ヲシテ之ヲ本人ニ交付セシム

前項退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ハ本證書ト同一ノ効力アルモノトス

第二十四條 退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ添ヘ居住地ノ市町村長ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ届出ヘシ府縣知事ハ證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ署名捺印シテ本人ニ交付シ之ヲ文部大臣ニ報告スヘシ

第二十五條 此規則ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道ニ於テハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市町村長ノ職務ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ嶋司郡區長戸長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フヘシ

勅令第十七號 (明治二十五年二月八日)

朕府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於ケル學校職員ノ資格及其在職年數ノ算定ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於ケル學校職員ノ資格及其在職年數算定方

第一條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料遺族扶助料法ニ於テ府縣立師範學校及公立中學校ノ正教員トハ教諭助教諭訓導トシ准教員トハ其他ノ教員トス  
第二條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第六條ニ掲クル府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ準スヘキ官立公立學校職員ト認ムヘキ者左ノ如シ

- 一 官立學校ノ學校長及教官
- 二 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十九條第二項ニ依リ退隱料等ノ制ヲ設ケタル公立學校ノ學校長教員ニシテ退隱料等ヲ受クヘキ資格アル者
- 三 明治二十六年三月三十一日以前小學校ニアラサル公立學校ノ學校長教員ニシテ判任官ノ待遇又ハ判任以上文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者

第三條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起

算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

明治十四年六月以前ヨリ在職ノ者ハ同年同月ヨリ起算ス

府縣立師範學校長非職中ノ年數及月數並府縣立師範學校長補在職中ノ年數及月數ハ在職年數ニ算スヘシ府縣立師範學校ノ正教員及公立中學校ノ學校長正教員休職中ノ年數月及亦同シ

第四條 第二條ニ掲クル官立公立學校職員ヨリ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ轉シタル者ノ退隱料等ノ給與上在職年數ニ算入スヘキ年數及月數左ノ如シ

- 一 第二條第一ニ掲クル者ニ在テハ官立學校ニ於ケル在官年數ニ對シ官吏恩給法ニ於テ算入スヘキ在官ノ年數及月數
  - 二 第二條第二ニ掲クル者ニ在テハ該公立學校ニ於テ退隱料等ノ給與上算入スヘキ在職ノ年數及月數但該公立學校ニ於ケル勤務ニ對シ退隱料ヲ受クル者ハ其退隱料ヲ受クヘキ事由ノ生シタル前ノ在職年數及月數ヲ算入セス
  - 三 第二條第三ニ掲クル者ニ在テハ該公立學校ニ於ケル在職ノ年數及月數
- 第五條 左ニ掲クル年數及月數ハ在職年數ヨリ除算スヘシ
- 一 男子年齡二十年未滿女子年齡十八年未滿ノ在職年數及月數

二 退隱料ヲ受クルノ權利又ハ資格ヲ失ヒタル者再ヒ就職シタルトキハ其前在職ノ年數及月數

三 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十條第二項ノ給與ヲ受ケタル者又ハ同條第三項ノ但書ノ申立ナクシテ之ヲ受ケサリシ者再ヒ就職シタルトキハ其前在職ノ年數及月數

四 恩給若クハ退隱料ヲ受クヘキ職ニアル者ニシテ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ヲ兼ヌルトキハ其兼職中ノ年數及月數

勅令第五號 (明治二十五年一月十一日)

朕府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法納金收入規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法納金收入規則

第一條 府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十六條第一項ニ依リ府縣立師範學校長ヨリ國庫ニ納ムヘキ金員ハ明治二十三年勅令第二百二十五號官吏遺族扶助法納金收入規則ニ依リ收納スヘシ

公立中學校長并府縣立師範學校公立中學校ノ正教員合監書記ヨリ國庫ニ納ムヘキ

金員ハ俸給仕拂ノトキ會計事務ヲ管理スル府縣官吏郡役所會計吏又ハ市町村收入役ニ於テ之ヲ差引スヘシ

第二條 前條第二項ニ依リ差引シタル金員ハ會計事務ヲ管理スル府縣官吏又ハ郡役所會計吏又ハ市町村收入役ヨリ毎翌月十日マテニ仕譯書ヲ添ヘ之ヲ收入官吏ニ納付スヘシ

第三條 府縣公立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十六條第二項ニ依リ府縣市町村ヨリ國庫ニ納ムヘキ金員ハ毎年四月十日及十月十日マテニ其前六箇月分ヲ金庫ニ拂込ムヘシ

文部省訓令第一號 (明治二十五年二月十二日)

北海道廳 府縣

明治二十五年(二月)文部省令第一號公立學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則ニ依リ調製スヘキ計算書ハ左ノ書式ニ依ルヘシ

退隱料年額計算書書式甲號 (始メテ退隱料ヲ請求シタル者ニ用フ)

元何學校長(教諭)(助教諭)(何々)

退隱料年額計算書

位勳爵 氏

何年何月生 明治何年何月 何年何箇月

明治何年何月何日	任何官(職)	何年何箇月
同何年何月何日	任何官(職)	
同何年何月何日	任何官(職)	何年何箇月
同何年何月何日	任何官(職)	
同何年何月何日	何學校雇(或ハ何々)	除算
同何年何月何日	何學校雇(或ハ何々)	
同何年何月何日	任何官(職)	何年何箇月
同何年何月何日	任何官(職)	
同何年何月何日	任何官(職)	何年何箇月
同何年何月何日	任何官(職)	
同何年何月何日	任何官(職)	何年何箇月
同何年何月何日	任何官(職)	

通計何年退職現時俸給年額金何圓ノ二百四十分ノ若干  
 退隱料年額金何圓  
 支給規則第十七條何項ニ依リ退隱料最下金額金何圓ノ若干  
 增加退隱料年額金何圓

(退隱料年額又ハ退隱料年額ト増加退隱料年額ト合セタル金額ノ四分ノ一) 每期給額金 何圓何拾何錢  
 明治何年何月ノ給額金何圓何拾何錢 (書記給額)

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也

年月日

取調主任 官 氏 名 印

扶助料年額計算書へ添付スルトキハ年數計算ノ未行「何々ニ依リ退職」及通計何年ノ下「退職」「死去」下記シ増加退隱料及每期給額等ハ記載スルニ及ハス  
 勤務年數ニ拘ラス退隱料ヲ給與スヘキ者例セハ准教員ノ退隱料年額計算書ノ類ハ此書式中在職年數計算ニ關スル事項ヲ省キ適宜調製スヘシ  
 退隱料年額計算書々式乙號

(退隱料ヲ受ケタル後再ヒ退隱料ヲ請求シタルモノニ用フ)

退隱料年額計算書

元何學校長(教諭)(助教諭)(何々)

位勳爵 氏 名

何年何月生 明治何年何月何年何箇月

年月日任免ノ書 何年何箇月 計何年何箇月

右退職ノ節受ケタル退隱料半額金何圓

年月日任免ノ書式ハ甲號ニ依ル何年何箇月計何年何箇月

通計何年退現職時俸給年額金何圓ノ二  
十四十分ノ若干

退隱料年額金何圓  
前ノ退隱料年額ニ比較シ金何圓増

每期給額 金何圓何拾何錢

明治何年何月ノ給 額金何圓何拾何錢

(初期給額)

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也

取調主任 官 氏 名 印

扶助料年額計算書々式

元何學校長(教諭)(助教諭)(何々)

故位勳爵氏名寡婦(孤兒)(父)(母)(祖父)(祖母)

氏 名

何年何月生 明治何年何月  
何年何箇月

退隱料年額金何圓ノ三分ノ二(二)

每期給額金何圓何拾何錢

扶助料年額金何圓

明治何年何月ノ給額

金何圓何拾何錢

(初期給額)

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也

年月日

取調主任 官 氏 名 印

退隱料ヲ受クヘキ資格ヲ有シテ死去シタル者ノ遺族ヨリ扶助料ヲ請求シタルトキ  
ハ此計算書ノ外退隱料年額計算書書式甲號若クハ乙號ノ計算書ヲ添付スヘシ  
扶助料ノ轉給ヲ請求シタル者エハ退隱料年額ノ一行ヲ記載スルニ及ハス  
官吏遺族扶助法第十五條ヲ適用スヘキモノ、計算書ハ此書式ニ準シ適宜調製スヘ  
シ

扶助金計算書書式

扶助金計算書

故何學校長(教諭)(助教諭)(何々)

位勳爵氏名寡婦(孤兒)(父)(母)(祖父)(祖母)

氏 名

故氏名退職年數

年月日任免ノ書式ハ退隱料  
年額計算書書式甲號ニ依ル

何年何箇月

計何年何箇月

明治何年何月何日 死

在職最終俸給年額金何圓ノ百分ノ一金何圓何拾何錢ヲ退職年數ニ乗シタル額  
金何圓何拾何錢

右證據書類ニ依リ取調候處相違無之候也

年月日

取調主任

官氏名印

官吏遺族扶助法第十一條ヲ適用スヘキ者ノ計算書ハ此書式等ニ準シ適宜調製スヘシ

○法律第十三號 (明治二十九年三月二十二日)

第一條 明治二十三年法律第九十號ハ第十五條ヲ除キ公立實業補習學校ノ教員ニ適用シ同年法律第九十一號ハ第一條及第二十條ヲ除キ公立ノ高等女學校、專門學校 (實業補習學校ヲ除ク) 公立學校長及教員舎監書記ニ適用ス

第二條 明治二十三年法律第九十號第二條及同年法律第九十一號第三條ハ非職又ハ休職滿期ニ依リ退職シ及校務ノ伸縮ニ依リ退職ヲ命シタル場合ニモ適用ス  
退職料ハ本職最終ノ俸額ニ依リ之ヲ算定ス

第三條 明治二十三年法律第九十號同年法律第九十一號及此ノ法律ニ依リ退職料等ヲ受クヘキ學校長、正教員舎監書記ノ在職年月數ハ各公立學校ノ間ニ於テハ之ヲ通算ス

第四條 府縣立師範學校長タリシ者他ノ文官ト爲リ若クハ他ノ文官タリシ者府縣立師範學校長トナリタルトキハ其ノ在官年月數ハ明治二十三年法律第九十一號及官吏恩給法ニ於テハ各其ノ規定スル所ニ依リ其ノ在官年數若クハ在職年數中ニ通算スヘキモノトス

第四條ノ二 學校長正教員舎監又ハ書記タリシモノ教員其他教育事務ニ従事スル文官トナリタルトキ若クハ教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官タリシモノ學校長正教員舎監又ハ書記トナリタルトキハ各其ノ在官在職年數ヲ通算シ明治二十三年法律第九十號及同年法律第九十一號ノ退職料扶助金ヲ受クルコトヲ得  
通算スルコトヲ得ヘキ官職ノ種類及通算ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條ノ三 同一人ニシテ國庫ヨリ公立學校職員退職料及官吏恩給又ハ軍人恩給 (賑恤金、給助金、扶助料ヲ除ク) 若クハ同一ノ事由ノ爲メニ公立學校職員遺族扶助料及官吏遺族扶助料法又ハ軍人恩給法ニ依レル扶助料ヲ併セ受クヘキモノアルトキハ本人ノ所擇ニ任セ其ノ一ヲ給ス

附 則

第五條 此ノ法律ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○文部省令第二十九號 (明治三十二年五月十八日)



明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關スル規定ヲ設クルコノ左ノ如シ

第一條 國庫ヨリ他ノ退隱料又ハ恩給ヲ受クル者又ハ受クヘキ權利ヲ有スルモノニシテ府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料ニ依リ退隱料ヲ請求スルトキハ同時ニ國庫ヨリ他ノ退隱料若クハ恩給ヲ受ケサル旨ヲ請求書ニ記載スヘシ

第二條 國庫ヨリ他ノ扶助料ヲ受クル者又ハ受クヘキ權利ヲ有スル者ニシテ府縣立師範學校長俸給并公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ依リ扶助料ヲ請求スルトキハ同時ニ國庫ヨリ他ノ扶助料ヲ受ケサル旨ヲ請求書ニ記載スヘシ

第三條 教官其他教育事務ニ従事スル文官タリシ者ニシテ明治二十九年法律第十三號第四條ノ一ニ該當シ退隱料扶助料扶助金ヲ受クヘキ者アルトキハ其前職ニ屬スル種類ノ退隱料扶助料扶助金ヲ支給ス

第四條 明治二十四年文部省令第七號同第二十四號明治二十五年文部省令第一號同第二號明治二十七年文部省令第三號ハ明治二十九年法律第十三號施行上之ヲ準用ス

附 則

第五條 明治二十九年文部省令第四號ハ廢止ス

○勅令第二百一號 (明治三十二年五月十六日)

第一條 明治二十九年法律第十三號ニ於ケル正教員准教員ノ別左ノ如シ

一 公立實業補習學校ニ於テハ訓導及訓導ノ資格アル學校長ヲ以テ正教員トシ准訓導ヲ以テ准教員トス

二 公立ノ高等女學校専門學校實業學校(實業補習學校ヲ除ク)其ノ他ノ公立學校ニ於テハ教諭助教諭訓導ヲ以テ正教員トシ其他ノ教員ヲ以テ准教員トス

第二條 明治二十九年法律第十三號ニ於テ通算スルコトヲ得ヘキ文官ノ種類左ノ如シ

- 一 官立學校及圖書館職員
- 二 文部省官吏

第三條 教育事務ニ従事スル北海道府縣郡區島廳並臺灣總督府縣廳辦務署官吏前條ニ掲クル文官ノ在官年數ヲ公立學校職員ノ在職年數ト通算スル場合ニ於テ算入又ハ除算スヘキ年數ハ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第四條 明治二十四年勅令第二百四十八號明治二十五年勅令第五號同年勅令第十八號同年勅令第三十三號及明治三十二年勅令第九十六號ハ明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關シ特ニ規定スルモノヲ除ク外之ヲ準用ス

附 則

第五條 明治二十九年勅令第九號ハ廢止ス

○勅令第二百六十四號 (明治二十九年七月二日)

學校職員恩給審査規程

第一章 公立學校職員恩給審査委員

第一條 文部省ニ公立學校職員恩給審査委員ヲ置キ委員長一人委員四人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

公立學校職員恩給審査委員ハ市町村立小學校及公立實業補習學校ニアラサル公立學校ノ學校長及教員ノ退隱料及遺族扶助料ヲ受クヘキ資格及權利ヲ審査ス

第二條 公立學校職員恩給審査委員長ハ審査ニ關スル事務ヲ管理シ審査ノ結果ヲ文部大臣ニ具申ス

第三條 公立學校職員恩給審査委員長及委員ハ文部省高等官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ命ス

第四條 文部省ニ恩給顧問醫三人ヲ置キ内一人ヲ常務顧問醫トス

恩給顧問醫ハ公立學校職員恩給審査委員長ノ諮詢ニ應ジ退隱料及遺族扶助料ニ關スル醫術上ノ事項ヲ審査ス但委員長ニ於テ總顧問醫ノ意見ヲ聞クコトヲ必要ト認

メサルモノハ常務顧問醫之ヲ審査ス

第五條 審査上特殊ノ専門家ヲ要スル場合ニ於テハ臨時顧問醫ヲ加フルコトヲ得

第六條 恩給顧問醫ハ文部大臣之ヲ命ス

第七條 常務顧問醫ニハ一箇年五百圓以内其ノ他ノ顧問醫ニハ事件ノ輕重難易ヲ斟酌シ每件三圓以上十圓以下ノ手當ヲ給ス

第八條 公立學校職員恩給審査委員ノ事務ニ關シ書記ヲ置キ文部屬ヲ以テ之ニ充ツ

第二章 市町村立小學校教員恩給審査委員

第九條 北海道廳府縣ニ市町村立小學校恩給審査委員ヲ置キ委員長一人及委員四人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

市町村立小學校教員恩給審査委員ハ市町村立小學校教員並ニ公立實業補習學校ノ學校長及教員ノ退隱料及遺族扶助料ヲ受クヘキ資格及權利ヲ審査ス

第十條 市町村立小學校教員恩給審査委員長ハ審査ニ關スル事務ヲ管理シ審査ノ結果ヲ北海道廳長官府縣知事ニ具申ス

第十一條 市町村立小學校教員恩給審査委員長ハ其ノ廳高等官委員ハ其ノ廳官吏ノ中ヨリ北海道廳長官府縣知事之ヲ命ス

第十二條 北海道廳府縣ニ恩給顧問醫三人以内ヲ置ク

恩給顧問醫ハ市町村立小學校教員恩給審査委員長ノ諮詢ニ應シ退隱料及遺族扶助料ニ關スル醫術上ノ事項ヲ審査ス

第十三條 審査上特殊ノ専門家ヲ要スル場合ニ於テハ臨時顧問醫ヲ加フルコトヲ得

第十四條 恩給顧問醫ハ北海道長官府縣知事之ヲ命ス

第十五條 顧問醫ニハ相當ノ手當ヲ給ス其費用ハ北海道廳及沖繩縣ニ在テハ地方經費ニ屬スル費用ノ負擔トシ其他ノ府縣ニ在テハ府縣ノ負擔トス

第十六條 市町村立小學校教員恩給審査委員ノ事務ニ關シ書記ヲ置キ北海道廳府縣屬ヲ以テ之ニ充ツ

生徒

○文部省達第一號 (明治十八年二月十二日)

府縣ニ於テ徵兵事務條例第十六條但書ニ據リ生徒ハ在學證明書ヲ交付スルトキハ左ノ書式ニ據ラシムヘシ此旨相違候事

書式(用紙公用野紙紙質適宜)

證明書

族籍

姓名

年齢

右ハ本校何學科第何級修業中ノ生徒ニシテ既ニ幾箇年ノ課程ヲ卒リタル者ナリ依テ之ヲ證明ス

年月日

何府立何學校長姓名印

學校認定及指定

○文部省令第三十四號 (明治三十二年六月二十八日)

公立私立學校認定ニ關スル規則

第一條 公立私立學校ニシテ徵兵令第十三條又ハ文官任用令第三條ニ關シ官立府縣立中學校ト同等以上トシテ文部大臣ノ認定ヲ受クントスルトキハ公立學校ニ在リテハ其管理者、私立學校ニ在リテハ其學校代表者ニ於テ左ノ事項ヲ記載シタル書類ヲ添ヘ申請スヘシ但特別ノ規定ニ依リ文部大臣ニ開申シ若クハ其認可ヲ得タル事項ハ之ヲ省略スルコトヲ得

- 一 學校ノ沿革
- 二 學則
- 三 學校長、學校長ナキトキハ其學校代表者ノ履歷
- 四 教員ノ氏名、資格、分擔學科及專任兼任ノ區別
- 五 生徒定員、現在生徒學年及學級別員數
- 六 卒業生ノ員數及卒業後ノ情況
- 七 校地、校舍及寄宿舎ノ圖面
- 八 經費及維持ノ方法

九 教科書目録

十 教授用器具、器械及標本目録  
特別ノ規定アルモノヲ除ク外學則ニ規定スヘキ事項ニ關シテハ中學校令施行規則第五十四條第二項ノ規定ヲ準用ス

第二條 前條ノ申請ニ基キ文部大臣ニ於テ認定ヲ爲スヘキ學校ハ其管理及維持ノ方法確實ニシテ所定ノ學科ヲ教授スルニ足ルヘキ相當ノ教員及設備ヲ具ヘ左號ノ一ニ該當スルモノニ限ル

- 一 專門學校ニ在リテハ其入學者ハ中學校卒業生若ハ中學校令施行規則第一條ノ各學科ニ就キ中學校卒業ノ程度ニ依リ入學試験ヲ行ヒ之ニ合格シタル者ニシテ修業年限三箇年以上ノモノ
- 二 實業學校ニ在リテハ甲種實業學校若ハ之ト同等以上ノ學科程度ヲ具ヘ修業年限三箇年以上ノモノ
- 三 其他ノ學校ニ在リテハ其學科程度、入學規則、編制及設備等中學校ノ規定ニ準シ且其教員全數ノ三分ノ一以上ハ專任ニシテ中學校ノ教員免許狀ヲ有スルモノ

第三條 文部大臣又ハ地方長官ハ必要ト認メタルトキハ主務官吏ヲシテ認定ヲ受ケ

タル學校ノ入學試驗ニ立會ハシメ又ハ入學試驗問題及其答按ヲ查閱セシムヘシ  
前項ノ場合ニ於テ試驗ノ問題又ハ方法中不適當ト認めタルモノアルトキハ當該官  
吏ハ其變更ヲ命スルコトヲ得

第四條 認定ヲ受ケタル學校ニ於テ學則、生徒定員、校地、校舍及學校維持ノ方法  
ヲ變更セントスルトキハ公立學校ニ在リテハ其管理者私立學校ニ在リテハ其學校  
代表者ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ但特別ノ規定ニ依リ文部大臣ノ認可ヲ受  
ケ又ハ中學校令施行規則ニ依リ文部大臣ニ届出ツヘキ事項ニ關シテハ各々其ノ規  
定ニ依ルヘシ

學校代表者變更ノ場合ニ於テモ前項ノ規定ニ依ルヘシ

第五條 中學校令施行規則第三十四條第四十八條第五十一條及第五十二條ノ規定ハ  
認定ヲ受ケタル學校ニ關シテ之ヲ準用ス

第六條 認可ヲ受ケタル學校ニ於テ第二條ノ規定ニ該當セサル生徒ヲ入學セシムル  
トキハ其生徒ニ特別ノ名稱ヲ附シ且其學籍簿ヲ別冊トナスヘシ但認定ノ効力ハ本  
文ノ生徒ニ及ハス

前項ノ生徒ニ關シテハ第五條ノ表簿ヲ便宜省略スルコトヲ得

第七條 認定ヲ受ケタル學校ハ公立學校ニ在リテハ其管理者私立學校ニ在リテハ其

學校ノ代表者ニ於テ毎年六月三十日ノ調査ニ依リ翌月中ニ左ノ事項ヲ文部大臣ニ  
開申スヘシ但特別ノ規定ニ依リ文部大臣ニ開申スヘキ事項ニ付テハ各其規定ニ依  
ルヘシ

- 一 學校長及教員ノ氏名、資格、分擔學科及專任兼任ノ區別
- 二 現在生徒學年及學級別員數
- 三 前學年中ノ卒業生員數及卒業後ノ情況
- 四 當該學年ニ於ケル入學生徒數
- 五 當該年度經費豫算ノ細目
- 六 教科書目錄

第八條 認定ヲ受ケタル學校ニシテ此規則ニ違背シ又ハ其成績不良ナリト認めタル  
トキハ文部大臣ハ將來ニ向テ其認定ヲ取消スコトアルヘシ

第九條 此規則ニ依リ文部大臣ニ提出スヘキ書類ハ地方長官ヲ經由スルヲ要ス  
地方長官ニ於テ前項ノ書類ヲ受ケタルトキハ其書類及實況ヲ精査シ意見ヲ附シテ  
進達スヘシ

附 則

第十條 本令ハ明治三十二年七月十五日ヨリ施行ス

第十一條 明治二十六年文部省令第十五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十二條 本令施行前ニ爲シタル認定ハ尙其效力ヲ有ス但本令ニ牴觸スル事項アル

一キハ當該學校ニ於テ本令施行ノ日ヨリ六箇月内ニ文部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ修  
正スヘシ

文部省令第三十四號參照

文部省令第十五號(明治二十六年十一月四日)

一 明治二十一年文部省令第三號ヲ本月十日限廢止ス

一 明治二十一年文部省令第三號ニ依リ從前學則ヲ認可シタル私中學校ニシテ中學  
校卒業ノ者若クハ中學校ノ程度ニ依リ相當ナル豫備ノ學科ヲ修メタル者ヲ入學  
セシムルモノハ中學校ノ學科程度ト同等以上ト認め仍徵兵令第十三條ニ依ルコ  
トヲ得シム但將來從前ノ學則ヲ變更スル場合ニ於テハ地方長官ノ認可ヲ請フヘ  
シ地方長官ハ之ヲ文部大臣ニ開申スヘシ

○文部省訓令第五號 (明治三十年五月三十一日)

北海道廳 府縣

明治二十九年勅令第三百七十九號陸軍補充條例第七條第二ニ依リ指定スヘキ郡市町  
村立及私立尋常中學校ハ左記第一項ノ各目ニ該當スルヲ要スル儀ニ付該事項ヲ具備

スルモノアリト思考スルトキハ左記第二項各目ノ調書ヲ具シテ稟申スヘシ

第一項

- 一 教員中其半數以上ハ專任ニシテ且尋常中學校ノ教員免許狀ヲ有スルモノ
- 二 毎年ノ經常費五千圓以上ノモノ
- 三 現在生徒ノ總數二百名以上ノモノ
- 四 尋常中學校トシテ設置ノ認可ヲ得タル以來三學年ヲ經過シ成績佳良ナルモノ  
但中學校トシテ認可ヲ得タル前設置シタル學校ニシテ中學校類似ノ課程ヲ  
設ケ既ニ卒業生アリテ其成績佳良ナルコトヲ証明スルニ足ルヘキモノハ本  
文ノ年限ヲ經過スルヲ要セス

第二項

- 一 設立年限及其後ノ沿革
- 二 入學規程
- 三 學科及其程度、日課表
- 四 學級及組ノ編制、現在生徒數
- 五 教員ノ數及資格並ニ分擔學科
- 六 卒業生ノ數及卒業後ノ狀況

- 七 教科用及參考用圖書目録
- 八 敷地校舍及教授用器械等ノ設備
- 九 校費(經常ト臨時トヲ別ツ)及維持ノ方法
- 十 校長又ハ校主ノ履歷其他試験規則、校則等

高等學校

勅令第七十五號 (明治二十七年六月二十三日)

高等學校令

第一條 第一高等中學校、第二高等中學校、第三高等中學校、第四高等中學校及第五高等中學校ヲ高等學校ト改稱ス

第二條 高等學校ハ專門學科ヲ教授スル所トス但帝國大學ニ入學スル者ノ爲メ豫科ヲ設クルコトヲ得

第三條 高等學校ハ其ノ附屬トシテ低度ナル特別學科ヲ設クルコトヲ得

第四條 高等學校ニ於テ設クル所ノ學科及講座ノ數ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第五條 本令ハ明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス但各高等學校ニ於テ學科ヲ設置スルノ時期ハ文部大臣之ヲ指定スヘシ

本令ヲ施行シ又ハ一部ヲ施行スル所ノ高等學校ニ於テ高等中學校ノ學科ヲ履修スル年期内ニ在ル生徒ノ爲ニ舊學科ヲ存スルコトヲ得

○文部省令第十五號(明治二十七年七月十二日)

第三高等學校ニ法學部醫學部工學部ヲ設置シ第一第二第四第五高等學校ニ醫學部及

大學豫科ヲ設置ス

此ノ省令ハ明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス

○文部省令第七號 (明治三十年四月十七日)

第三高等學校ニ大學豫科ヲ設置ス

第五高等學校ニ工學部ヲ設置シ其修業年限ヲ四個年トス

此省令ハ明治三十年九月十一日ヨリ施行ス

○文部省令第三號 (明治三十三年四月十九日)

第六高等學校ニ大學豫科ヲ設置シ明治三十三年九月十一日ヨリ授業ヲ開始ス

文部省令第十三號 (明治二十四年六月七日)

第七高等學校造士館ニ大學豫科ヲ設置シ明治三十四年九月十一日ヨリ授業ヲ開始ス

○文部省令第十六號 (明治二十七年七月十二日)

高等學校ノ修業年限及入學程度ヲ定ムルコト左ノ如シ

高等學校修業年限及入學程度

第一條 第三高等學校ノ法學部工學部及各高等學校ノ醫學部ノ修業年限ハ四箇年トス但醫學部ニ於ケル藥學科ノ修業年限ハ舊ニ仍ル

大學豫科ノ修業年限ハ三箇年トス

第二條 高等學校入學ノ程度ハ尋常中學校卒業ノ程度ニ依ル

○文部省令第十七號 (明治廿七年七月十七日)

明治廿七年勅令第七十五號高等學校令第四條ニ依リ第三高等學校ニ設置スル法學部工學部及各高等學校ニ設置スル醫學部ノ學科目及講座ノ數左ノ如シ

法學部

經濟學 一講座 刑法刑事訴訟法 一講座 憲法行政法 一講座

法學通論民法 三講座 商法 一講座 國際法 一講座

民事訴訟法裁 一講座  
判所構成法

前ニ掲ケタル學科目ノ外必修科トシテ國語及漢文、倫理、體操ヲ置キ隨意科トシテ外國語ヲ置ク

工學部

數學 二講座 地質學鑛物學 二講座 機械工學 二講座

物理學力學 二講座 圖畫測量 二講座 應用化學 二講座

化學 二講座 土木工學 二講座 採鑛冶金學 二講座

前ニ掲ケタル學科目ノ外必修科トシテ體操ヲ置キ隨意科トシテ外國語ヲ置ク



醫學部

- 解剖學組織學 二講座 病理學 一講座 眼科學 一講座
- 生理學 一講座 內科學藥物學 三講座 生科學婦人科學 一講座
- 衛生學法醫學 一講座 外科學 二講座 藥學 三講座

但第三高等學校醫學部ニ於テハ藥學ヲ設ケス

前ニ掲ケタル學科目ノ外必修科トシテ醫用動物學醫用植物學醫用物理學醫用化學體操ヲ置キ隨意科トシテ外國語ヲ置ク

○文部省令第六號 (明治三十年五月十七日)

明治二十七年勅令第七十五條高等學校令第四條ニ依リ第五高等學校工學部ノ學科及

講座ノ數ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 數學力學 二講座 化學地質礦物 一講座 土木工學 三講座
- 物理學 一講座 製造冶金學 一講座 機械工學 二講座
- 圖書測量 一講座

前ニ掲ケタル學科目ノ外必修科トシテ國語及漢文外國語體操ヲ置ク

○文部省令第十三號 (明治三十三年八月四日)

高等學校大學豫科學科規程

第一條 高等學校大學豫科學科ノ學科ヲ分テテ第一部、第二部及第三部トス

第一部ノ學科ハ法科大學及文科大學志望者ニ第二部ノ學科ハ工科大學、理科大學、理工科大學及農科大學志望者ニ第三部ノ學科ハ醫科大學志望者ニ課スルモノトス

第二條 第一部ノ學科ハ倫理、國語及漢文、外國語、歷史、論理及心理、法學通論

、體操トス

前項ノ學科ノ外文科大學志望者ニハ經濟通論ヲ課ス

前二項ノ學科中文科大學哲學科志望者ニハ論理及心理ヲ缺キ數學、物理ヲ課ス

外國語ハ英語、獨語及佛語ノ中ニ就キ二種ヲ選ハシム

第一項ノ學科ノ外法科大學志望者ニハ隨意科トシテ羅旬語ヲ課スルコトヲ得

第三條 第二部ノ學科ハ倫理、國語、外國語、數學、物理、化學、地質及礦物、圖畫、體操トス

前項ノ學科ノ外理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並農科大學志望者ニハ動物及植物ヲ課シ工科大學及理工科大學ノ土木工學科、機械工學科、電氣工學科、採鐵及冶金學科、工科大學ノ造船學科、建築學科、理科大學及理工科大學ノ數學科、物理學科、理科大學ノ星學科並ニ農科大學ノ農學科、農藝化學科、林學科志望者ニハ測量ヲ課ス

外國語ハ英語ノ外獨語又ハ佛語ヲ選ハシム但シ工科大學及理工科大學ノ電氣工學科、應用化學科、製造化學科、探鑛及冶金學科並ニ農科大學志望者ハ必ス獨語ヲ選フヘキモノトス

第一項ノ學科ノ外理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學ノ獸醫學科志望者ニハ隨意科トシテ羅甸語ヲ課スルコトヲ得

第四條 第三部ノ學科ハ倫理、國語、外國語、羅甸語、數學、物理、化學、動物及植物、體操トス

外國語ハ獨語ノ外英語又ハ佛語ヲ選ハシム  
第五條 各部各學科ノ每週授業時數ハ左ノ如シ

第一部

學科	學年	第一	第二	第三	年
倫理	第一				
國語及漢文	第一	六			
英語	第一	(九)			
國語及漢文	第二		五		
英語	第二		(九)		
國語及漢文	第三			四	
英語	第三			(八)	

獨語	佛語	歷史	論理及心理	法學通論	經濟通論	體操	計
(九)	(九)	三	三	四	三	三	二〇
(九)	(九)	三	三	四	三	三	三二
(八)	(八)	三	三	三	{二}	三	二九

備考

表中ハ撰擇科目ノ時數ヲ表シハ文科大學志望者ニノミ課スル時數ヲ表ス  
文科大學哲學科志望者ニハ第三年ニ於テ國語ヲ缺ク且之ニ課スヘキ數學物理ノ授業時數左ノ如シ

學科	學年		
	第一	第二	第三
學科	第一	第二	第三
算學			二
物理			二
<p>英語ヲ以テ入學シ法科大學ノ獨逸法又ハ佛蘭西法ヲ選修スル法律學科並ニ文科大學ノ獨逸文學科、佛蘭西文學科ニ志望スル者ニ對シテハ外國語ノ授業時數ヲ左ノ如ク變更ス</p>			
學科	第一	第二	第三
英語	四	四	四
獨語又ハ佛語	一四	一四	一三
<p>隨意科トシテ法科大學志望者ニ課スヘキ羅旬語ノ授業時數左ノ如シ</p>			
羅旬語	第一	第二	第三
			二

第二部

學科	學年		
	第一	第二	第三
學科	第一	第二	第三
倫理			一
國語	三		四
英語	八	七	四
獨語又ハ佛語	八	七	四
數學	五	四	六
物理		三	三
化學		三	五
地質及礦物			二
圖畫	四	四	二
體育	三	三	三
<p>講義 二 實驗 三</p>			

計

三三

三三

三〇

第三年ニ於テ理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學ノ農學科、農藝化學科、獸醫學科志望者ニハ數學ヲ缺キ工科大學及理工科大學ノ土木工程學科、機械工學科、工科大學ノ造船學科、建築學科、理科大學及理工科大學ノ數學科、物理學科及理科大學ノ星學科志望者ニハ化學ノ實驗ヲ缺キ理科大學ノ各學科、理工科大學ノ數學科、物理學科、純正化學科及農科大學志望者ニハ圖畫ヲ缺キ農科大學林學科志望者ニハ英語ヲ缺ク

理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學志望者ニ課スヘキ動物及植物ノ授業時數左ノ如シ

學科	學年	第一	第二	第三	第四
動物及植物					四

工科大學及理工科大學ノ土木工程學科、機械工學科、電氣工學科、探鑛及冶金學科、工科大學ノ造船學科、建築學科、理科大學及理工科大學ノ數學科、物理學科、理科大學ノ星學科並ニ農科大學ノ農學科、農藝化學科、林學科志望者ニ課スヘキ測量ノ

授業時數左ノ如シ

學科	學年	第一	第二	第三	第三
測量					三

隨意科トシテ理科大學ノ動物學科、植物學科、地質學科並ニ農科大學ノ獸醫學科志望者ニ課スヘキ羅旬語ノ授業時數左ノ如シ

學科	學年	第一	第二	第三	第二
羅旬語					二

第三部

學科	學年	第一	第二	第三	第三
倫理					一
國語		三			
獨語		三			一〇

英語又ハ佛語			三		三		三
羅旬語							二
數			三		二		
物					三	講義 三三	六
化學					三	講義 三三	六
動物及植物			四	實驗	三		
體操			三		三		三
計			二九		三〇		三一
獨語ヲ以テ入學シタル者ニ對シテハ外國語ノ授業時數ヲ左ノ如ク變更ス							
學科	年	第一	第二	第三	第三		年
獨語		九	九	三			八
英語又ハ佛語		七	七				五

第六條 前條ノ各學科ハ生徒卒業後分科大學各學科ノ授業ヲ受クルニ足ルヘキ豫備ノ程度ヲ以テ標準トナスベシ

第七條 學校長ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ分科大學某科志望者ニ課スヘキ一學科若ハ數學科ヲ其學校ニ置カサルコトヲ得

附則

第八條 本令ハ明治三十三年九月一日ヨリ施行ス

第九條 本令施行ノ際現ニ第二年又ハ第三年ノ課程ヲ修ムル者ニ就キテハ其卒業ニ至ルマテ文部大臣ノ許可ヲ受ケ舊規程ニ依リ若ハ新舊ノ規程ヲ斟酌シテ之ヲ教授スルコトヲ得

○文部省訓令第九號

各高等學校

高等學校大學豫科ニ關スル現行ノ規程ハ概テ數年前ノ制定ニ係リ改正ヲ要スヘキモ之妙カラス茲ニ文部省令第十三號ヲ發布シ其ノ學科規程ヲ改正シタルハ既往ノ實驗ニ徴シ特ニ緊急改正ノ必要ヲ認メタレハナリ依テ左ニ其ノ要領ヲ表示シ併セテ本大臣ノ意見ヲ開陳ス各學校長及教官ハ宜シク其ノ意ヲ體シ該令ノ旨趣ニ副ハムコトヲ務ムヘシ

高等學校大學豫科帝國大學ノ豫備教育ヲ施ス處ナルヲ以テ大學ニ於ケル各專門學科ノ授業ヲ受クルニ必要ナル知識ヲ授クルヲ以テ目的トシ豫備學科ノ區劃多岐ニ涉リ其ノ修得スル所却テ散漫ニ流ル、カ如キハ務メテ之ヲ避ケサルヘカラス故ニ新規程ニ於テハ豫備學科ノ區劃ハ成ルヘク之ヲ大體ニ止メ各學科ノ配當及其授業時數等ニ適當ノ改正ヲ施シ以テ確實ナル豫備教育ノ本領ヲ完カラシメンコトヲ期ス

齋性ノ涵養ハ教育ノ第一義ニシテ高等學校ニ於テモ常ニ意ヲ此ニ致シ其ノ完成ヲ企圖スヘキハ固ヨリ辯ヲ俟タスト雖モ舊規程ニ於テハ倫理科ノ授業時數ニ一定ノ規定ナキヲ以テ各學校ニ於ケル施行ノ方法齊一ナラス概テ每週一時ヲ割テ該科ノ教授ニ充テタルカ如シ抑モ高等學校ノ生徒ハ既ニ小學ヨリ中學ニ至ルマテ多年ニ涉リテ實踐道徳ノ教育ヲ受ケ來リタルモノナルヲ以テ高等學校ニ於ケル倫理科ハ故ラニ修身ニ關スル授業ヲ施サズ學校長常ニ德育ノ中心ト爲リ機ニ臨ミ生徒ヲ訓誡シ各教官ニ於テモ適切ノ方法ニ依リ常ニ其ノ品性ヲ誘掖陶冶スルコトヲ務メ第三年ニ至リ近世學理ノ上ヨリ人倫ノ大道ニ關スル稍高尚ノ知識ヲ與ヘ平素學習セル科學上ノ知識トノ調和ヲ圖リ以テ倫理教育ノ上ニ圓滿ナル成果ヲ收メムコトヲ望ム

外國語ニ習熟セシムルニハ各專門學科教授ノ豫備トシテ最必要ナルニ拘ハラヌ之ヲ從來ノ經驗ニ徵スルニ高等學校ヲ卒業シ進ミテ大學ニ入ル者ノ缺點ハ外國語ノ力ノ

不充分ナルニ在リ是レ改正規程ニ於テ各部ヲ通シテ著シク其ノ授業時數ヲ増加シタル所以ナリ而シテ此ノ増加シタル時間ニ於テハ適宜科學ニ關スル外國ノ參考書等ニ習熟セシムヘシ然レトモ語學ノ教授ハ單ニ授業時數ノ増加ノミニ依リテ必スシモ其ノ進歩改善ヲ望ミ得ヘキニアラス教授法ノ改善亦隨テ之ニ伴ハサルヘカラス故ニ當該教官ハ宜シク常ニ適切ナル教授方法ヲ攷究シ改正ノ旨趣ヲ空シカラシメサラムコトヲ要ス

第二部及第三部ニ於テ特ニ著シク國語及漢文ノ授業時數ヲ減シタルハ該部專門學科ノ豫備トシテハ深ク文學上ノ知識ヲ授クルノ必要ナク能ク國語漢文ヲ調和シテ簡明達意ノ文ヲ綴リ得ルニ至ラシムルヲ以テ足レリトスレハナリ故ニ該部ニ於テハ其ノ名稱ヲ改メテ單ニ國語ト爲シ一層此ノ目的ニ適ハシムトス而シテ國語ト漢文教育上最密接ノ關係ヲ有スル學科ナルヲ以テ第一部ニ於テ之ヲ教授スルニ方リテモ兩者ヲシテ成ルヘク相待チ相扶ケ以テ適當ナル融合調和ヲ圖ラムコトヲ要ス

其ノ他改正ノ細目ニ就テハ敢テ茲ニ詳説セスト雖モ之ヲ要スルニ本改正ノ旨趣ニ基キ大學豫備教育ノ實質的改善ヲ完ウスルハ各學校長及教官ノ周到ナル用意ニ待ツモノ多シトス

第三編 實業學校  
總 則

勅令第二十九號 (明治三十二年二月六日)

實業學校令

第一條 實業學校ハ工業農業商業等ノ實業ニ従事スル者ニ須要ナル教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 實業學校ノ種類ハ工業學校農業學校商業學校商船學校及實業補習學校トス  
蠶業學校山林學校獸醫學校及水産學校等ハ農業學校ト看做ス

徒弟學校ハ工業學校ノ種類トス

第三條 北海道及府縣ニ於テハ實業學校ヲ設置スルコトヲ得但シ道廳府縣立實業補習學校ハ他ノ道廳府縣立實業學校ニ附設スル場合ニ限ル

第四條 前條ノ實業學校ノ經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除ク外府縣ノ負擔トス  
文部大臣ハ土地ノ情況ニ應シ必要ナル實業學校ノ設置ヲ府縣ニ命スルコトヲ得

第五條 郡市町村 北海道及沖繩 又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其ノ區域内小學教育ノ施設上妨ナキ場合ニ限り實業學校ヲ設置スルコトヲ得

第六條 私人ハ本令ノ規定ニ依リ實業學校ヲ設置スルコトヲ得

第七條 工業學校農業學校商業學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ實業補習學校ノ設置廢止ハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

實業學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條 實業學校ハ學科及其ノ程度ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 實業學校ノ教科書ハ公立學校ニ在リテハ學校長ニ於テ私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ地方長官ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第十條 實業學校教員ハ資格ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十一條 公立實業學校職員ノ俸給旅費其ノ他諸給與ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第十二條 公立實業補習學校職員ノ名稱待遇ハ公立小學校ノ例ニ依ル

第十三條 實業學校ノ編制及設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四條 實業學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スルコトヲ得

第十五條 本令施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附 則

第十六條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第十七條 本令ハ官立學校ニ適用セス

第十八條 他ノ法令中ニ技藝學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然實業學校ト看做ス

第十九條 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令申徒弟學校及實業補習學校ニ關スル規程ハ本令施行ノ日ヨリ其ノ効力ヲ失フ

○文部省令第十二號 (明治三十二年三月二日)

明治三十二年勅令第二十九號實業學校令第七條ニ基キ實業學校設置廢止規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

實業學校設置廢止規則

第一條 工業學校農業學校商業學校及商船學校ヲ設置セントスルトキハ公立學校ニ在リテハ其管理者ニ於テ私立學校ニアリテハ其設立者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ稟申スヘシ但實業學校令第三條ニ依リ設置スル場合ニハ第八號ノ事項ヲ具スルコトヲ要セス

一 名稱

二 位置

三 學則

四 生徒定員



五 敷地建物ノ圖面(坪數地質附近ノ情況ヲ記載シタルモノ)並ニ其所有ノ區別  
 六 收入支出豫算表  
 七 職員數及俸給額ノ豫定  
 八 設置區域内ニ於ケル當該實業ノ情況  
 九 設立者ノ履歷法人又ハ組合ノ設立ニ係ルモノハ其定款、寄附行為又ハ組合契約及其沿革但定款又ハ寄附行為ニシテ文部大臣ノ認可ヲ受ケタルモノハ添付ヲ要セズ

前項第一號乃至第五號ノ變更ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ學九號ノ變更ハ文部大臣ニ開申シ第六號ハ每會計年度前ニ文部大臣ニ開申スヘシ但國庫ノ補助ヲ受クル學校ノ豫算表ハ此限ニアラス

第二條 學校長ヲ任免シタルモノキハ公立學校ニアリテハ地方長官ニ於テ私立學校ニアリテハ設立者ニ於テ其都度文部大臣ニ開申スヘシ但任用ノ場合ニハ履歷書ヲ添付スヘシ

第三條 地方長官ニ於テ實業補習學校ヲ道廳府縣立實業學校ニ附設シタルトキ又ハ其設置ヲ認可シタルトキハ第一條第一項第一號乃至第五號ノ事項ヲ具シテ文部大臣ニ開申スヘシ其變更ノ場合亦同シ但國庫ノ補助ヲ受クル學校ニ關シテハ此限ニアラス

アラヌ

第四條 第一條ノ學校ヲ廢止セントスルトキハ其事由並ニ生徒ノ處分方法ヲ具シテ文部大臣ニ稟申スヘシ

第五條 地方長官ニ於テ實業補習學校ヲ廢止シタルトキ又ハ其廢止ヲ認可シタルトキハ其旨文部大臣ニ開申スヘシ

第六條 道廳府縣立ニアラサル實業學校ニ關シテ文部大臣ニ提出スヘキ文書ハ地方長官ヲ經由スヘシ但其設置廢止ノ稟申ニ關シテハ地方長官ハ其意見ヲ具スヘシ

附 則

第七條 此規則ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○文部省令第十三號(明治三十二年三月三日)

實業教育費國庫補助法第七條ニ基キ實業學校教員養成規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

實業學校教員養成規程

第一條 東京帝國大學農科大學本科若クハ實科高等商業學校及東京工業學校ノ學生生徒ニシテ卒業ノ後實業學校ノ教職ニ從事スヘキ者ニハ學費ヲ補給スルコトアルヘシ

補給スル金額ハ十月六月以内トス

第三條 前條ノ學生生徒ハ農科大學ニ於テハ同大學長高等商業學校及東京工業學校ニ於テハ當該學校長之ヲ選定ス

第三條 農業補習學校教員養成ノ爲農業教員養成所ヲ置キ農科大學長ヲシテ之ヲ管理セシム

商業學校及商業補習學校教員養成ノ爲商業教員養成所ヲ置キ高等商業學校長ヲシテ之ヲ管理セシム

工業學校徒弟學校及工業補習學校教員養成ノ爲工業教員養成所ヲ置キ東京工業學校長ヲシテ之ヲ管理セシム

第四條 第一條ノ學生生徒ノ員數及各養成所ニ募集スヘキ生徒ノ員數ハ毎年文部大臣之ヲ定ム

第五條 農業教員養成所ノ修業年限ハ二箇年トス  
商業教員養成所ノ修業年限ハ二箇年トス  
工業教員養成所ノ修業年限ハ三箇年トス

第六條 第一條ノ學生生徒ニハ最終ノ學年ニ於テ教育學及教授法ヲ學習セシム

第七條 農業教員養成所ノ學科目ハ倫理、農業汎論、農藝化學、耕種、畜産、農業、經濟、教育學、教授法、體操トス

商業教員養成所ノ學科目ハ倫理商業作文、商業算術、商業地理、商業歴史、簿記、商品、經濟學、商業學、商法、商業實踐、英語、教育學、教授法、體操トス  
工業教員養成所ニ本科及速成科ヲ置キ本科ヲ分チテ、金工科、木工科、染織科、窯業科、應用化學科、工業圖案科トシ速成科ヲ分チテ金工科、木工科、染織科、機織科、陶器科、漆工科トス但各學科ノ科目ハ本科ニアリテハ左ニ掲クルモノトシ速成科ニアリテハ別ニ之ヲ定ム  
金工科、木工科ノ科目ハ倫理、數學、物理學、圖畫、無機化學、應用重學、工場用具及製作法、工業經濟、工業衛生、英語、教育學、教授法、體操、實習ノ外金工科ニアリテハ電氣工學大意、發動機、機械製圖トシ木工科ニアリテハ構造用材料、家具及建築流派、家屋構造、衛生建築、製圖及意匠トス  
染織科、窯業科、應用化學科ノ科目ハ倫理、數學、物理學、化學、圖畫、一般應用化學、應用機械學、定性分析、定量分析、工業分析、機械製圖、工業經濟、工業衛生、英語、教育學、教授法、體操、實習ノ外染織科ニアリテハ染色及配色、機織及意匠トシ窯業科ニアリテハ窯業品製造トシ應用化學科ニアリテハ特別應用化學、電鑄及電鍍トス  
工業圖案科ノ科目ハ倫理、數學、物理學、化學、圖畫、圖案材料、機械製圖、工

業經濟、工業衛生、英語、教育學、教授法、體操、實習トス實業教員養成所生徒ニシテ師範學校ヲ卒業シタル者ニハ教育學ヲ課セサルコトヲ得

第八條 各養成所ニ入學スヘキ者ノ資格ハ年齢十七年以上ニシテ師範學校中學校若クハ之ト同等以上ノ實業學校卒業ノ程度トス但工業教員養成所速成科ニ入學スヘキ者ノ資格ハ別ニ之ヲ定ム

第九條 各養成所生徒ニハ一箇月六圓以内ノ學費ヲ補給ス但假入學ノ間ハ學費ヲ補給セス

第十條 工業教員養成所管理者ハ其卒業生ニ研究生トシテ尙一箇年以内在學ヲ命スルコトヲ得但研究生ニ補給スル學費ハ前條定額ヨリ増加スルコトヲ得

第十一條 第一條ノ學生生徒及各養成所ノ生徒ハ卒業ノ日ヨリ學費ノ補給ヲ受ケタル年限ニ一箇年ヲ加ヘタル間期文部大臣ノ指定ニ依リ實業學校ノ教職ニ從事スヘキ義務ヲ有ス但シ必要ノ場合ニ於テハ文部大臣ハ他ノ教職ニ從事スルノ義務ヲ負ハシムルコトアルヘシ

第十二條 第一條ノ學生生徒及各養成所ノ生徒ハ半途ニシテ退學シ若クハ前條ノ義務ヲ盡サ、ルトキハ補給シタル學費ヲ償還スヘキモノトス但文部大臣ハ事情ヲ酌量シテ其全部又ハ一部ノ償還ヲ免除スルコトアルヘシ

第十三條 工業教員養成所ニ附屬工業補習學校ヲ置キ工業教員養成所生徒ヲシテ實地授業ヲ練習セシム

工業補習學校ノ學科ハ金工木工ノ二科トス  
工業補習學校ノ細則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ東京工業學校長之ヲ定ム

附 則

第十四條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第十五條 本令施行ニ關スル各教員養成規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ各管理者之ヲ定ム

第十六條 明治二十七年文部省令第十二號工業教員養成規程ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十七條 明治二十七年文部省令第十二號工業教員養成規程第六條ニ依リ義務ヲ有スル者ハ本令第十一條ノ例ニ依ル

○文部省令第八號 (明治三十二年二月二十五日)

明治三十二年勅令第二十九號實業學校令第八條及第十三條ニ基キ工業學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

工業學校規程

第一條 工業學校ノ修業年限ハ三箇年トス但一箇年以内延長スルコトヲ得

第二條 工業學校ノ授業時數ハ實習ヲ除キ毎週二十七時以内トス但實習時數ハ學科ノ種類ニ依リ適宜之ヲ定ムヘシ

第三條 工業學校ノ學科目ハ修身、讀書、作文、數學、物理、化學、圖畫、體操並ニ實業ニ關スル各學科ノ科目及實習トス但本項科目ノ外地理、歷史、博物、外國語、經濟、法規、簿記及其他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得

實業ニ關スル各學科ノ科目ハ左ニ掲クル事項ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ム  
ハシ

一土木科 測重、應用力學、河海工、道路鐵道、橋梁、施工法、製圖等

一金工科 應用力學、工場用具及製作法、製造用諸機械大意、發動機大意、製圖等

一造船科 應用力學、工場用具及製作法、發動機大意、造船製圖等

一電氣科 應用力學、工場用具及製作法、發動機大意、電氣及磁氣、電氣工學、製圖等

一木工科 應用力學、家屋構造、工場用具及製作法、建築沿革、施工法、配景法、製圖及繪畫等

一鑛業科 地質、採鑛、冶金、試金、應用力學、發動機大意、測量製圖及坑内演習等

一染織科 機械法、生染法、應用化學、應用機械學、分析、製圖及繪畫等

一窯業科 窯業品製造、應用化學、應用機械學、分析、製圖及繪畫等

一漆工科 漆器製造法、工藝史、繪畫、應用化學大意等

一圖案繪畫科 配景法、解剖大意、工藝史、建築沿革大意、繪畫、應用化學大意、各種工藝品圖案等

前項ノ外特種工業ノ爲ニハ便宜學科ヲ設クルコトヲ得

第四條 工業學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十四年以上學力修學年限四箇年ノ高等小學條卒業又ハ之ト同等以上トス但外國語ヲ試驗科目ニ加フルコトヲ得

第五條 工業學校ニハ豫科ヲ附設スルコトヲ得

第六條 豫科ノ修業年限ハ二箇年以内トス

第七條 豫科ノ授業時數ハ毎週三十時以内トス

第八條 豫科ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、算術、地理、歷史理科、圖畫、體操トス但外國語ヲ加フルコトヲ得

第九條 豫科ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十二年以上學力高等小學校第二學年修了以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十條 工業學校ニハ簡易ノ方法ニ依リ工業ニ必要ナル事項ヲ教授スル爲別科ヲ設

クルコトヲ得

第十一條 工業學校ニ於テ卒業ノ後特ニ工業ニ關スル一科目若クハ數科目ヲ專攻セシトスル者ノ爲ニ專攻科ヲ置クコトヲ得

第十二條 專攻科ノ修業年限ハ二箇年以内トス

第十三條 工業學校ノ學科及徒弟學校ノ學科ヲ一校内ニ併置スルコトヲ得

第十四條 土地ノ情況ニ依リ本令規定ノ工業學校ノ程度ヨリ更ニ高等ナル工業學校ヲ設置スルコトヲ得

第十五條 工業學校ノ學則ハ左ノ事項ヲ規定スルコトヲ要ス

一 學校ノ目的

二 修業年限

三 授業日數

四 休業日

五 學科目及其程度

六 各學科目毎週授業時數

七 入學退學ノ規程

八 試驗法

九 賞罰ノ規程

十 授業料規程(授業料ヲ徴收スル場合)

十一 寄宿舍規程(寄宿舍ヲ設クル場合)

十二 前各號ノ外學校管理上必要ノ事項

第十六條 工業學校ニ於テハ學科目、授業時數及學級數ニ應シ相當ノ教員ヲ置クコトヲ要ス

第十七條 工業學校ニ於テハ校地内若クハ其附近ニ於テ體操場ニ充ツヘキ相當ノ場所ヲ設クルコトヲ要ス

第十八條 工業學校ニ於テハ通常教室、特別教室、工業實習場、其他必要ノ諸室ヲ備フルコトヲ要ス

第十九條 工業學校ニ於テハ相當ノ教授用及參考用圖書、器具、機械、標本、模型、實習用諸機械、體操用器具等ヲ備フルコトヲ要ス

附 則

第二十條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○文部省令第九號 (明治三十一年二月二十五日)

明治三十二年勅令第二十九號實業學校令第八條及第十三條ニ基キ農業學校規程ヲ定

ムルコト左ノ如シ

農業學校規程

第一條 農業學校ハ甲種ノ二種トス

土地ノ情況ニ依ツ甲種農業學校ノ程度ヨリ更ニ高等ナル農業學校ヲ設置スルコトヲ得

第二條 甲種農業學校ノ修業年限ハ三箇年トス但一箇年以内延長スルコトヲ得

第三條 甲種農業學校ノ授業時數ハ實習ヲ除キ毎週三十時以内トス但實習時數ハ農事ノ繁閑ニ應シ適宜之ヲ定ムヘシ

第四條 甲種農業學校ノ學科目ハ修身、讀書、作文、數學、物理、化學、博物、經濟、體操並ニ實業ニ關スル科目及實習トス但本項科目ノ外地理、歴史、外國語、法規、簿記、圖書及其他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得

實業ニ關スル科目ハ土壤、肥料、作物、園藝、農産製造、畜産、養蠶、病虫害、氣候、林學大意、獸醫學大意、水産學大意等ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

第五條 甲種學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齢十四年以上學力修業年限四箇年ノ高等小學校卒業又ハ之ト同等以上トス但外國語ヲ試験科目ニ加フルコトヲ得

第六條 乙種農業學校ノ修業年限ハ三箇年以内トス

第七條 乙種農業學校ノ授業時數ハ實習ヲ除キ毎週二十七時以内トス但實習時數ハ農事ノ繁閑ニ應シ適宜之ヲ定ムヘシ

第八條 乙種農業學校ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、算術、理科、體操並ニ實業ニ關スル科目及實習トス但本項科目ノ外地理、歴史、經濟、圖書及其他ノ科目ヲ便宜加設シ又土地ノ情況ニ依リ短期ノ教授ヲ必要トスル場合ニハ修身及實業ニ關スル科目ノ外科目若クハ數科目ヲ缺クモ可トヲ得

實業ニ關スル科目ハ土壤、肥料、作物、農産製造、家畜、養蠶、病虫害、氣候等ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

第九條 乙種農業學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齢十二年以上學力修業年限四箇年ノ尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十條 甲種農業學校ニハ豫科ヲ附設スルコトヲ得

第十一條 豫科ノ修年限ハ二箇年以内トス

第十二條 豫科ノ授業時數ハ毎週三十時以内トス  
第十三條 豫科ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、算術、地理、歴史、理科、圖書、體操トス但外國語ヲ加フルコトヲ得

第十四條 豫科ニ入學スル者ノ資格ハ年齢十二年以上學力高等小學校第二學年修了以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十五條 農業學校ニ簡易ノ方法ニ依リ農業ニ必要ナル事項ヲ教授スル爲別科ヲ設クルコトヲ得

第十六條 修期一箇年以内ノ乙種農業學校ノ教場及別科ノ教場ハ隨時必要ノ地ニ分設スルコトヲ得

第十七條 甲種農業學校ニ於テ卒業ノ後特ニ農業ニ關スル一科目若クハ數科目ヲ專攻セントスハ者ノ爲ニ專攻科ヲ置キ又更ニ高等ノ農業學校ニ入ラントスル者ノ爲ニ補習科ヲ置クコトヲ得

第十八條 專攻科及補習科ノ修業年限ハ各二箇年以内トス  
第十九條 甲乙兩種ノ農業學校ノ學科及第二十六條ノ學校ノ學科ヲ一校内ニ併置スルコトヲ得

第二十條 農業學校ノ學則ハ左ノ事項ヲ規定スルコトヲ要ス

- 一 學校ノ目的
- 二 修業年限
- 三 授業日數

四 休業日

五 學科目及其程度

六 各學科目每週授業時數

七 入學退學ノ規程

八 試驗法

九 賞罰ノ規程

十 授業料規程(授業料ヲ徴收スル場合)

十一 寄宿舍規程(寄宿舍ヲ設クル場合)

十二 前各號ノ外學校管理上必要ノ事項

第二十一條 農業學校ニ於テハ學科目、授業時數及學級數ニ應シ相當ノ教員ヲ置クコトヲ要ス

第二十二條 農業學校ニ於テハ校地内若クハ其附近ニ於テ體操場ニ充ツヘキ相當ノ場所及實習用ニ供スヘキ必要ノ農地ヲ設クルコトヲ要ス

第二十三條 農業學校ニ於テハ通常教室、特別教室、作業場、肥料場等ノ建物ヲ備フルコトヲ要ス

第二十四條 農業學校ニ於テハ相當ノ教授用及參考用圖書、器具、機械、農具、標

本、體操用器具等ヲ備フルコトヲ要ス

第二十五條 蠶業學校、山林學校、獸醫學校及水產學校ハ第四條第八條ノ外總テ前各條ニ準ス

第二十六條 蠶業學校、山林學校、獸醫學校及水產學校ノ學科目ハ左ノ如シ

甲種ノ學校ニ在リテハ修身、讀書、作文、數學、物理、化學、博物、經濟、體操並ニ實業ニ關スル科目及實習トス但本項科目ノ外地理、歷史、外國語、法規、簿記、圖畫及其他ノ科目ヲ便宜加設シ獸醫學校ニ在リテハ數學、物理、博物、經濟ヲ缺クコトヲ得

乙種ノ學校ニ在リテハ修身、讀書、習字、作文、算術、理科並ニ實業ニ關スル科目及實習トス但本項科目ノ外地理、歷史、經濟、圖畫、體操及其他ノ科目ヲ便宜加設シ又土地ノ情況ニ依リ短期ノ教授ヲ必要トスル場合ニハ修身及實業ニ關スル科目ノ外一科目若シハ數科目ヲ缺クコトヲ得

甲乙兩種學校ノ各學科ノ實業ニ關スル科目ハ左ニ掲クル事項ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

一蠶業學校ニ在リテハ蠶體解剖生理及病理、養蠶及製種、製絲、桑樹栽培、氣候、農學大意等

一山林學校ニ在リテハ造林及森林保護、森林利用、森林測量及土木、測樹術及林價算法、森林經理、氣候、農學大意等  
一獸醫學校ニ在リテハ解剖及組織、生理、藥物及調劑法、蹄鐵法、及蹄病論、内科、外科、寄生動物、畜産、衛生、獸疫、産科、剖檢法等  
一水產學校ニ在リテハ水産動植物、漁撈、製造、養殖、地文及氣象、漁撈製造用諸機械大意、漁船構造及運用等

附 則

第二十七條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第二十八條 明治二十七年文部省令第十九號簡易農學校規程ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○文部省令第十號 (明治三十二年二月二十五日)

明治三十二年勅令第二十九號實業學校令第八條及第十三條ニ基キ商業學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

商業學校規程

第一條 商業學校ハ甲乙ノ二種トス

土地ノ情況ニ依リ甲種商業學校ノ程度ヨリ更ニ高等ナル商業學校ヲ設置スルコト



ヲ得

第二條 甲種商業學校ノ修業年限ハ三箇年トス但一箇年以内延長スルコトヲ得

第三條 甲種商業學校ノ授業時數ハ毎週三十三時以内トス

第四條 甲種商業學校ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、數學、地理、歴史、外國語、經濟、法規、簿記、商品、商事要項、商業實踐、體操トス但本項科目ノ外他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得

第五條 甲種商業學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齢十四年以上學力修業年限四箇年ノ

高等小學校卒業又ハ之ト同等以上トス但外國語ヲ試験科目ニ加フルコトヲ得

第六條 乙種商業學校ノ修業年限ハ三箇年以内トス

第七條 乙種商業學校ノ授業時數ハ毎週三十時以内トス

第八條 乙種商業學校ノ學科目ハ修身、證書、習字、作文、算術、地理、簿記、商事要項、體操トス但本項科目ノ外他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得

第九條 乙種商業學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齢十年以上學力修業年限四箇年ノ尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十條 甲種商業學校ニハ豫科ヲ附設スルコトヲ得

第十一條 豫科ノ修業年限ハ二箇年以内トス

第十二條 豫科ノ授業時數ハ毎週三十時以内トス

第十三條 豫科ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、算術、地理、歴史、外國語、理科、圖畫、體操トス但本科ニ於テ理科又圖畫ヲ加設シタルトキハ之ヲ缺クコトヲ得

第十四條 豫科ニ入學スル者ノ資格ハ年齢十二年以上學力高等小學校第二學年修了以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十五條 甲種商業學校ニ於テ卒業ノ後特ニ商業ニ關スル一科目ヲ專攻セントスル者ノ爲ニ專攻科ヲ置クコトヲ得

第十六條 商業學校ハ或學科ヲ限リ專修セントスル者ノ爲ニ專修科ヲ設クルコトヲ得

第十七條 專攻科及專修科ノ修業年限ハ各二箇年以内トス

第十八條 甲乙兩種ノ商業學校ノ學科及商船學校ノ學科ヲ一校内ニ併置スルコトヲ得

第十九條 商業學校ノ學則ハ左ノ事項ヲ現定スルコトヲ要ス

一 學校ノ目的

二 修業年限

- 三 授業日數
  - 四 休業日
  - 五 學科目及其程度
  - 六 各學科目每週授業時數
  - 七 入學退學ノ規程
  - 八 試驗法
  - 九 賞罰ノ規程
  - 十 授業料規程(授業料ヲ徴收スル場合)
  - 十一 寄宿舍規程(寄宿舍ヲ設クル場合)
  - 十二 前各號ノ外學校管理上必要ノ事項
- 第二十條 商業學校ニ於テハ學科目、授業時數及學級數ニ應シ相當ノ教員ヲ置クコトヲ要ス
- 第二十一條 商業學校ニ於テハ校地内若クハ其附近ニ於テ體操場ニ充ツヘキ相當ノ場所ヲ設クルコトヲ要ス
- 第二十二條 商業學校ニ於テハ通常教室、特別教室、商業實踐室、其他必要ノ諸室ヲ備フルコトヲ要ス

第二十三條 商業學校ニ於テハ相當ノ教授用圖書、器具、機械、標本、模型、商品見本、體操用器具等ヲ備フルコトヲ要ス

附 則

第二十四條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第二十五條 明治十七年文部省達第一號商業學校通則ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○文部省令第十一號 (明治三十二年二月二十五日)

明治三十二年勅令第二十九號實業學校令第八條及第十三條ニ基キ商船學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

商船學校規程

- 第一條 商船學校ハ甲乙ノ二種トス
- 土地ノ情況ニ依リ甲種商船學校ノ程度ヨリ更ニ高等ナル商船學校ヲ設置スルコトヲ得
- 第二條 甲種商船學校ノ修業年限ハ三箇年以内トス但實習ヲ課スルトキハ相當ノ期間之ヲ延長スルコトヲ得
- 第三條 甲種商船學校ノ授業時數ハ實習ヲ除キ每週二十七時以内トス但實習時數ハ學科ノ種類ニ依リ適宜之ヲ定ムハシ

第四條 甲種商船學校ノ學科目ハ修身、讀書、作文、數學、物理、地理、外國語、圖畫、體操並ニ實業ニ關スル各學科ノ科目及實習トス但本項科目ノ外化學、法規及其他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得

實業ニ關スル各學科ノ科目ハ左ニ掲クル事項ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

一航海科 運用術、航海術、機關術大意、海上氣象學大意、造船學大意等

一機關科 機關術、機械製圖、力學、應用力學、電氣學大意等

第五條 甲種商船學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十四年以上學力修業年限四箇年ノ高等小學校卒業又ハ之ト同等以上トス但外國語ヲ試驗科目ニ加フルコトヲ

第六條 乙種商船學校ノ修業年限ハ二箇年以内トス

第七條 乙種商船學校ノ授業時數ハ實習ヲ除キ每週二十七時以内トス但實習時數ハ學科ノ種類ニ依リ適宜之ヲ定ムヘシ

第八條 乙種商船學校ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、數學、體操並ニ實業ニ關スル各學科ノ科目及實習トス但本項科目ノ外他ノ科目ヲ便宜加設スルコトヲ得 實科ニ關スル各學科ノ科目ハ左ニ掲クル事項ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

一航海科 運用術大意、航海術大意、海上氣象學大意等

一機關科 機關術大意、機械製圖、物理、化學等

第九條 乙種商船學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十年以上學力修業年限四箇年ノ尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十條 甲種商船學校ニハ豫科ヲ附設スルコトヲ得

第十一條 豫科ノ修業年限ハ二箇年以内トス

第十二條 豫科ノ授業時數ハ每週三十時以内トス

第十三條 豫科ノ學科目ハ修身、讀書、習字、作文、算術、地理、歴史、理科、外國語、圖畫、體操トス

第十四條 豫科ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十二年以上學力高等小學校第二學年修了以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十五條 商船學校ニ於テ從來ノ海員ニシテ技術免狀ヲ有スル者相當ノ海上若クハ工場履歷ヲ有スル者其他海事ニ關スル學科目ヲ專修セントスル者ノ爲ニ專修業ヲ置クコトヲ得

第十六條 甲種商船學校ノ學科及乙種商船學校ノ學科ヲ一校内ニ併置スルコトヲ得

第十七條 商船學校ノ學則ハ左ノ事項ヲ規定スルコトヲ要ス

- 一 學校ノ目的
  - 二 修業年限
  - 三 授業日數
  - 四 休業日
  - 五 學科目及其程度
  - 六 各學科目毎週授業時數
  - 七 入學退學ノ規程
  - 八 試驗法
  - 九 賞罰ノ規程
  - 十 授業料規程(授業料ヲ徴收スル場合)
  - 十一 寄宿舎規程(寄宿舎ヲ設クル場合)
  - 十二 前各號ノ外學校管理上必要ノ事項
- 第十八條 商船學校ニ於テハ學科目、授業時數及學級數一應シ相當ノ教員ヲ置クコトヲ要ス
- 第十九條 商船學校ニシテ校舎ヲ陸上ニ設置シタルトキハ其校地内若クハ其附近ニ於テ繋留船舶ヲ以テ校舎ニ代用スルトキハ陸上ニ於テ體操場ニ充ツヘキ相當ノ場

所ヲ設クルコトヲ要ス

- 第二十條 商船學校ニ於テハ通常教室、特別教室、實習場、其他必要ノ諸室ヲ備フルコトヲ要ス
- 第二十一條 商船學校ニ於テハ相當ノ教授用及參考用圖書、器具、機械、標本、模型、實習用端舟及諸機械、體操用器具等ヲ備フルコトヲ要ス

附 則

第二十二條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

◎文部省令第二十號 (明治二十七年七月二十五日)

徒弟學校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

徒弟學校規程

- 第一條 徒弟學校ハ職工タルニ必要ナル教科ヲ授クル所トス
- 第二條 徒弟學校入學者ノ資格ハ年齢十二年以上及尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ但尋常小學校卒業ノ者ニアラサルモ特ニ學校長ノ許可ヲ得テ入學スルコトヲ得
- 徒弟學校ニ於テハ男女ヲ混同スルコトヲ得ス
- 第三條 徒弟學校ハ尋常小學校又ハ高等小學校ニ附設スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ

其ノ小學校ノ教授ヲ妨ケサル限ハ校舍及備品器具ヲ使用セシムルコトヲ得

第四條 徒弟學校ノ教科目ハ修身、算術、幾何、物理、化學、圖畫及職ニ直接ノ關係アル諸教科目並實習トス

前項ノ教科目ハ修身ヲ除ク外學校長ニ於テ便宜取捨撰擇シ又ハ隨意科トスルコトヲ得但實習ハ設備上又ハ其ノ他ノ關係ニ依リ學校ニ於テ教授スルニ不便ナル職業ニ限リ之ヲ缺クコトヲ得

第五條 徒弟學校ニ於ケル教科ハ一種又ハ數種ノ職業ニ就テ之ヲ定メ若ハ數種ノ職業ニ共通シテ之ヲ定ムハシ

第六條 尋常小學校ヲ卒業セスシテ入學ノ許可ヲ得タル者ニハ本科ノ外讀書、習字ヲ課スヘシ又作文ヲ加フルコトヲ得

尋常小學校卒業ノ者ト雖其ノ志望ニ依リ讀書、習字、作文ノ一科目又ハ數科目ヲ授クルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テ修身ハ讀書ニ附帶シテ之ヲ教授スルコトヲ得

第七條 徒弟學校ノ修業年限ハ六箇月以上四箇年以下トス

第八條 徒弟學校ハ日曜日又ハ夜間タリトモ便宜教授時間ヲ設クルコトヲ得

第九條 徒弟學校ハ土地ノ情況ニ應シ季節ヲ限リ教授スルコトヲ得

第十條 徒弟學校ノ教員ハ文部大臣ニ於テ工業教員タルニ適當ナリト認ムル者又ハ小學校教員ノ資格アル者又ハ相當ノ普通教育ヲ受ケ職業上ノ知識又ハ經驗ヲ有シ地方長官ノ許可ヲ得タル者ヲ以之ニ充ツヘシ

第十一條 徒弟學校ニ於テ教科用圖書ヲ用フル場合ニハ修身、讀書、習字ニ係ルモノハ尋常小學校高等小學校補習科又ハ實業補習學校用トシテ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノタルヘシ其ノ他ノ教科目ニ係ルモノハ檢定ヲ經ルノ限ニ在ラス

徒弟學校ノ教科用圖書ヘ府縣ニ於ケル審査探定ヲ要セス各學校長ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十二條 徒弟學校ノ教科目修業年限教授時間及季節ヲ定ムルニハ市町村立ニ係ルモノハ市參事會町村長(又ハ之ニ準スヘキ者)ニ於テ私立ニ係ルモノハ設立者ニ於テ地方長官ノ許可ヲ受クヘシ

第十三條 市町村立徒弟學校ニ於テハ實業又ハ教育ニ經歷アル者及其ノ學校ノ設立維持ニ功勞アル者ヲ以テ商議員トシ其ノ學校ニ關スル事件ヲ商議セシムルコトヲ得

第十四條 市町村立徒弟學校ニ於テ授業料ヲ徵收スルト否トハ市町村ノ便宜タルヘシ

第十五條 女子ニ刺繡、機織及其ノ他ノ職業ヲ授クル爲ニ設クル所ノ女子職業學校ニシテ此ノ規程ニ依ルモノハ徒弟學校ノ種類トス

省令說明

- 一 徒弟學校ヲ卒業シタル者ハ一ノ職工タルニ闕ク所ナカラシコトヲ期ス故ニ徒弟學校ハ職工タルニ必要ナル教科ヲ授クル所トス蓋シ小學教育ヲ補習モシメ且實業ノ思想ヲ興ヘ又ハ準備ノ實業教育ヲ授クルハ實業補習學校ノ任務ニシテ徒弟學校ハ之ニ反シ職業教科ヲ授クルヲ以テ主トスルモノナレハナリ
- 一 尋常小學校ヲ卒業セサル者及自己ノ志望ニ依ル者ヲ除ク外徒弟學校ノ教科ニ普通教育ヲ復習セシメ又ハ教授セサルモノハ一家生計ノ負擔ニ急ナル多數ノ少年ノ爲ニ使ヲ圖ルナリ此レ亦實業補習學校ト徒弟學校トノ異ナル所トス
- 一 貧人ノ子弟小學ニ入ルコト能ハスシテ賃工トナリ勞働ニ従事スルモノ、爲ニ夜學又ハ他ノ慈惠ノ方法ヲ設ケテ普通教育ヲ授クルハ徒弟學校規程ノ干涉スル所ニ非ス
- 一 年齢ヲ十二年以上ニ限リタルハ十二年ニ達セサルノ幼者ハ徒弟學校ノ教科ニ堪ヘサレハナリ
- 一 實修ヲ課スルノ標準ハ今日ノ現況ニ照ラシ最適切ナル方法ヲ求メタル結果ニ外

ナラス蓋シ學校ニ於テ充分ナル實修ヲ爲サントスルトキハ設備ノ要スル所地方ノ負擔ニ堪ヘサルモノ少カラサルヘク且或ル工業ノ種類ニ依リ職ノ伴侶ニ入り勞働スルノ習慣ハ必シモ之ヲ學校ニ移スノ必要ナカルヘク而シテ生徒ニシテ工場ニ於テ現業ヲ實習シ又學校ニ於テ現業ノ解釋又ハ基礎タルヘキ學科ヲ學フヲ以テ便トスル者蓋シ其ノ多キニ居ラン故ニ省令ハ設備及事情ノ許ス限リ實習ヲ課セシメ又便否ヲ斟酌シ之ヲ課セサルコトヲ認メタリ

一 徒弟學校ニ普通科ヲ授ケス而シテ獨リ修身ヲ必修科トスルモノハ凡百ノ少年教育ハ總テ修身ヲ本トスレハナリ

但徒弟學校ニ於ケル修身科ハ其ノ多キヲ要セス(一週一時ヲ以テ足レリトス)又必シモ教科書ヲ用キルヲ要セサルヘシ

○文部省令第一號 (明治三十五年二月十五日)

實業補習學校規程

第一條 實業補習學校ニ於ケル教科目ノ修業期間及教授時數ハ土地ノ情況ニ依リ適宜之ヲ定ムヘシ

第二條 實業補習學校ニ於テハ土地ノ情況及職業ノ種類繁閑等ニ依リ生徒ノ修業ニ最モ便宜ナル時間及季節ヲ擇ヒ教授スヘシ

第三條 實業補習學校ノ教科目ハ修身、國語、算術及實業ニ關スル科目トス但シ修身ハ國語ニ附帶シテ教授スルコトヲ得

前項ノ教科目中國語算術ハ之ヲ關キ又ハ土地ノ情況ニ依リ他ノ教科目ヲ加フルコトヲ得

修身、國語、算術及前項ニ依リ加フル教科目ハ之ヲ隨意科目ト爲スコトヲ得  
國語ハ讀書、作文、習字ニ算術ハ筆算、珠算ニ分チ生徒各自ノ志望ニ依リ其一事項若ハ數事項ヲ教授スルコトヲ得

第四條 實業ニ關スル科目ハ左ニ掲クル事項ヨリ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

一工業ニ關シテハ物理、化學、圖畫、模型幾何、製圖、圖案力學、材料、工具、製作ノ類

二農業ニ關シテハ物理、化學、博物、土壤、肥料、作物、耕耘、農具、病蟲害、園藝、養蠶、家畜、造林、丈量ノ類

三水産ニ關シテハ物理、化學、博物、地文、漁撈、製造、養殖漁船運用ノ類  
四商業ニ關シテハ商業算術、商業書信、商事要項、商品、商業地理、簿記、商業ニ關スル法令、外國語ノ類

前項ノ外或ル職業ノ爲ニ便宜其ノ科目ヲ定ムルコトヲ得

第五條 實業補習學校ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十年以下學力尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

但尋常小學校ヲ卒業セサルモ學齡ヲ過キタル者ニ限リ特ニ入學セシムルコトヲ得

第六條 實業補習學校學ハ小學校、實業學校又ハ其ノ他ノ學校ニ附設スルコトヲ得

第七條 實業補習學校ノ學則中に規定スヘキ事項凡左ノ如シ

一學校ノ目的

二修業期間ニ關スル事項

三教授ノ季節ニ關スル事項

四休業日ニ關スル事項

五教科目及其ノ程度ニ關スル事項

六教科目ノ教授時間及時數ニ關スル事項

七入學退學ニ關スル事項

八授業料等ニ關スル事項

第八條 實業補習學校ニ於テハ教科目、教授時數及學級數ニ應シ相當ノ教員ヲ置ク

第九條 實業補習學校ノ教科目、修業期間、教授時數及季節ハ道廳府縣立ニアラサ

レハ公立學校ニアリテハ管理者私立學校ニアリテハ設立者ニ於テ地方長官ノ認可  
ヲ受ケ之ヲ定ムルシ

但シ國庫ノ補助ヲ受ケル學校ニ關シテハ此ノ限ニ在ラス

第十條 實業補習學校ノ名稱ニハ補習學校ノ文字ヲ附スヘシ

附 則

第十一條 本令ハ明治三十五年四月一日ヨリ施行ス

第十二條 明治二十七年文部省令第二十六號中「實業補習學校」ヲ削ル

○文部省訓令第二號（明治三十五年二月十五日）

北海道廳 府 縣

曩ニ實業教育費國庫補助法及實業學校令ノ施行セラレシヨリ以來各種實業學校漸ク  
起リ就中實業補習學校ノ設置セラル、モノ多キヲ加フル狀アルハ洵ニ喜フヘキノ現  
象トス然レトモ實業補習學校ノ性質未タ十分ニ理會セラレサルカ爲之カ施設ノ順序  
方法等ニ關シ或ハ適切ヲ缺クモノナシトセス今日實業補習學業ト稱スルモノニシテ  
往々高等小學校ノ教科ニ幾分ノ變更ヲ施シタルニ過キサルカ如キモノアルハ頗ル遺

憾トスル所ナリ今回文部省令第一號ヲ以テ實業補習學校規程ヲ發布シ舊規程ヲ改正  
シタルハ其ノ本質ヲ明ニシ以テ時勢ノ進歩ト土地ノ情況トニ應シ適當ノ施設ヲ爲サ  
シメムコトヲ期シタルニ外ナラス實業補習學校ハ各種ノ實業ニ從事シ又ハ從事セン  
トスル者ニ簡易ナル方法ニ依リ其ノ職業ニ要スル智識技能ヲ授クルト同時ニ普通教  
育ノ補習ヲ爲スヲ以テ目的トス即チ實業ノ教科ヲ主腦トシ併セシ普通教育ノ補習ヲ  
爲シ兩者共ニ其ノ目的ヲ達スルヲ以テ實業補習學校ノ本旨トナスヘキコト專ラ普通  
教育又ハ實業教育ヲ施スカ爲ニ設ケラル、モノト復ニ其ノ趣旨ヲ異ニスル所ナリ  
教授時數及季節ノ選定ハ實業學校ニ於テ深ク意ヲ用フヘキ所ニシテ或ハ夜間或ハ日  
曜日或ハ職業上ノ休業日或ハ冬期農隙等土地ノ情況、生徒職業ノ種類、繁閑等ニ依  
リ其ノ修學ニ最モ便宜ナル時期ヲ擇ヒ簡易切實ニ教授セシメンコトヲ要ス  
實業補習學校ニ於テハ其ノ性質上多數ノ時間ヲ一定シテ教授ヲ爲サンコト固ヨリ望  
ムヘキモノニアラス然ルニ教授時數ノ多キヲ貧ルハ今日ノ通弊ニシテ彼ノ從來小學  
校ニ附設スルモノ、如キハ概テ同時ニ教授スルヲ以テ設備及教授共ニ不完全ニ陥リ  
兩者孰レモ其ノ本旨ヲ達スルヲ得サルハ宜シク戒ムヘキコトナリトス特ニ今回附設  
ノ範圍ヲ擴張シテ舊ニ小學校ノミナラス實業學校及中學校等ニモ及ホシタルヲ以テ  
此等ノ學校ニ附設スル場合ニアリテハ當該學校教授時間ノ前後又ハ休業日等ニ於テ



其ノ教授ヲ爲スコト、セハ互ニ相妨タル所ナキノミナラス教員設備ノ如キモ相兼スルノ便宜ヲ得テ各々其ノ効果ヲ完ツスルコトヲ得ヘシ

此ノ如ク實業補習學校ニ於ケル教授ノ時間及季節ハ多種多様ニ且長短不同ニ選定シ得ルヲ常トスルカ故ニ必シモ修業年限ヲ定ムルノ必要ナク寧ロ各教科目ニ就キ之カ修業期間ヲ定ムルノ適當ナルヘキヲ認メ今回之ニ關スル規定ヲ改メタリ而シテ修業期間ハ土地ノ情況ト教科目ノ種類トニ依リ或ハ之ヲ數週數月ノ短期トシ或ハ之ヲ數年ニ亘ルノ長期トスルコト固ヨリ其ノ任意タリ又同一學校ニ於テ修業期間ノ相異ナル教科目ヲ置キ生徒ノ志望ニ應シテ之ヲ選擇セシメ或ハ某期間ニ於テ某科目若シテ某事項ヲ修メ他ノ期間ニ於テ他ノ科目若ハ他ノ事項ヲ修メ數期間ニシテ始メテ全教科若ハ某教科ノ全部ヲ修了スルコトヲ得シムルカ如キ最モ實業補習學校ノ妙用ノ存スル所ナルヲ見ルヘシ

普通ノ教科目中讀書、習字、算術ハ從來之ヲ必須科目ト爲シタリト雖モ補習教育ハモト應用ヲ注トスヘキモノナレハ必シモ是等ヲ獨立ノ教科目トシテ設クルヲ須ヒス實業ニ關スル科目ニ依リテモ亦能ク普通教科目補習ノ目的ヲ達スルコトヲ得ヘキカ故ニ今回國語及算術ハ之レヲ缺クコトヲ得シメタリ故ニ普通ノ教科目ハ總テ之レヲ設クルモ悉ク之ヲ缺クモ又ハ單ニ其ノ一科目ヲ設クルモ皆地方ノ便宜タルヘシト雖

モ年少ノ生徒ニシテ普通教育ノ素養十分ナラサルモノニハ成ルヘク之ヲ課シ以テ補習ノ目的ヲ完フセシムルヲ可トス又土地ノ情況ニ依リテハ日本歴史、理科、唱歌等ノ如キ教科目ヲ加ヘテ補習ヲ爲サシムルノ必要ナシトセス故ニ改正ノ規程ニ於テハ此等ノ教科目ヲモ斟酌シ適宜之ヲ加フルノ自由ヲ與ヘタリ然レモ之カ爲ニ限リアル教授時間ニ於テ徒ニ教科目ヲ繁多ナルハ宜シク避クヘキコトナリトス而シテ以上ノ諸教科目ハ之ヲ設ケタル場合ニ於テモ亦皆之ヲ隨意科目ト爲スコトヲ得シメタルハ生徒各自ノ志望ト學力トニ應シ適切ノ教育ヲ受ケシムルノ要アルニ依ル

德育ハ教育ノ基礎ニシテ特ニ實業ニ従事スル子弟ニ對シテハ專ラ私利ニ馳スルノ弊ヲ避ケ信用ヲ重シシ公益ヲ尙フノ氣風ヲ養成スルノ要最モ切ナリ宜シク生徒各自ノ性情ニ應シ總テノ教科目ニ通シテ徳性ヲ涵養シ實踐躬行ヲ勸奨センコトヲ期セシムヘシ特ニ修身ヲ隨意科目トナシタル場合ニ於テハ最モ茲ニ留意シテ教養指導ノ途ヲ誤ラサラシメンコトヲ要ス

實業ニ關スル科目ハ土地ノ情況ニ應シ選擇最モ其ノ宜シキヲ得サルヘカラス省令ニ掲クル所ノモノハ僅ニ其數個ヲ例示シタルニ過キス故ニ圖書、圖案ノ如キ物理化學ノ如キ之ヲ合シテ各々一科目ト爲シ又博物ヲ動物、植物、礦物養蠶法、蠶病採種等ニ商事要項ヲ銀行保險、倉庫等ニ分科スルカ如ク便宜分合取捨スルコトヲ得ヘキハ

勿論ナリトス此ノ他特種ノ職業ノ爲ニハ又其ノ教科目ヲ定ムルコトヲ得シメタルカ故ニ必要ニ應シテ機織、刺繡、色染、髹漆、蒔繪、指物、木型、鍛冶、鍍金、陶器、製版、印刷、製本、醸造製紙、鞣革、製糖、蹄鐵、養禽、養蜂、庭園、製絲、酪農繡詰、鯉節、海苔養蠶等ノ事項ニ就キ撰定スル等土地ノ情況ニ應シ職業ニ適切ナラシメンコトヲ要ス而シテ學校ニ於テハ其ノ教授スル所ノ實業ノ教科目ニ依リテ生徒ヲシテ家庭工場若ハ商店ニ於テ學習シ能ハサル智識技能ヲ修得セシメ以テ生徒カ學校外ニ在リテ實地ニ操作スル所ノ事物ト密接ノ關係アラシメ内外相應シテ實業ノ發達ニ資セシメンコトヲ期スヘシ

入學ノ資格ニ關シテハ年齡十年以上學力尋常小學校卒業以上ニ於テ之ヲ定ムルコトヲ得シメタルカ故ニ地方ノ情況ト學校ノ種類トニ應シ適宜之ヲ定メ必シモ一律ニ拘泥セシメサランコトヲ要ス

實業補習學校ハ能ク少額ノ經費ヲ以テ容易ニ設置シ得ヘキカ故ニ主トシテ市町村ノ如キ團體ニ於テ施設スルヲ適當ト爲スト雖モ道廳府縣立實業學校ニ附設スル場合ニアリテハ道府縣ニ於テ之ヲ設置スルコトヲ得ヘキハ實業學校令第三條ニ規定セラル、所ナリ然ルニ是等附設學校ノ設置セラル、モノ殆ント之レナキノ現狀ニ就テハ遺憾ナキ能ハス自今各地方ニ於テ事情ノ許ス限リ其ノ道廳府縣立實業學校ニ實業補習

學校ヲ附設シ以テ其ノ地方ニ於ケル模範學校ト爲シ他ノ學校ヲシテ此ニ則ラシムルアラハ庶幾ハ實業補習教育ノ標的ヲ誤ラサルコトヲ得ン

實業學校ニシテ國庫ノ補助ヲ申請スルモノ比年遞加スルニ拘テス補助ノ金額ハ自ラ限アルヲ以テ治ク其ノ申請ヲ納ルコトヲ得ス地方長官ハ宜シク地方經濟ノ情況ヲ計リ實業補習學校ノ如キ必シモ多額ノ費用ヲ要セサモノニ對シテハ地方費ヲ以テ適宜補助セルノ方法ヲ講シ以テ國庫補助ノ及ハサル所ヲ補ヒ且從來補助ヲ受クル所ノ學校ニ對シテハ漸次國庫ノ補助ニ依頼セス獨立維持ノ途ヲ立テシメンコトヲ努ムヘシ今ヤ實業補習學校規程ヲ改正シタルニ依リ地方長官ハ克ク上述ノ主旨ヲ體シ彼ノ名ハ實業補習學校ト稱スト雖モ其ノ實小學校ノ變形ノ過キサルカ如キモノニ對シテハ努メテ之ヲ實業補習學校ノ本旨ニ適セシメ以テ名實相副ハシムルノ途ヲ講シ又將來設置セラル、所ノ學校ニ對シテハ能ク之ガ本旨ヲ誤ルコトナク地方ノ情況ニ適應スルノ施設ヲ爲シ以テ十分ノ効果ヲ收メシムルヘシ

○文部省令第十六號(明治三十四年十二月廿八日)

水産學校規程

第一條 水産學校本科ノ修業年限ハ三箇年トス但シ土地ノ狀況ニ依リニケ年乃至五ケ年以内ニ於テ伸縮スルコトヲ得

第三條 水產學校本科ノ教授時數ハ實習ヲ除キ每週二十七時以内トス但シ實習時數ハ適宜之ヲ定ムヘシ

第三條 水產學校本科ノ學科目ハ修身、國語、數學、地理、物理、化學、博物、圖書、法規及慣習、經濟、体操並ニ實業ニ關スル學科ノ學科目及實習トス但シ修身、實業ニ關スル學科目及實習ヲ除ク外本項ノ學科目ハ便宜之ヲ闕クコトヲ得前項學科目ノ外歴史、外國語、簿記、唱歌及其ノ他ノ學科目ヲ便宜加設スルコトヲ得

實業ニ關スル各學科ノ學科目ハ左ニ掲クル事項ヨリ撰擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

- 一 漁撈科 水產學大意、漁撈論、水產動物、水產植物、航海術、運用術、氣象及海洋學、船舶衛生及救急療法等
- 一 製造科 水產學大意、製造論、水產動物、水產植物、細菌學大意、分析、機械學大意等

一 養殖科、水產學大意、養殖論、水產動物、水產植物、發生學大意等  
漁撈、製造、養殖ノ三學科中二學科以上ノ學科目ヲ併セ授ケントスル學校ニ於テハ前項ノ學科目ニ就キ選擇シ又ハ便宜分合シテ之ヲ定ムヘシ

第四條 水產學校本科ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十四歲以上學力修業年限四ヶ年ノ高等小學校卒業又ハ之ト同等以上トス

第五條 水產學校ニ豫科ヲ置クコトヲ得

第六條 豫科ノ修業年限ハ二ヶ年以内トス

第七條 豫科ノ教授時數ハ每週三十時以内トス

第八條 豫科ノ學科目ハ修身、國語、算術、地理、歴史、理科、圖書、体操トシ但シ外國語、唱歌ヲ加フルコトヲ得

第九條 豫科ニ入學スル者ノ資格ハ年齡十二年以上學力高等小學校第二學年修了以上ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第十條 水產學校ニ於テハ簡易ノ方法ニ依リ水產ニ關シ必要ナル事項ヲ教授スル爲ニ別科ヲ置キ又水產ニ關スル事項若ハ數事項ヲ選修セシムル爲ニ選科生ヲ置クコトヲ得

第十一條 水產學校ニハ土地ノ情況ニ依リ別科ノミヲ置キ又ハ之ヲ分設スルコトヲ得

第十二條 別科ニ入學スル者ノ資格及選科生ノ入學資格ハ適宜之ヲ定ムヘシ

第十三條 水產學校ニハ本科卒業ノ後特ニ水產ニ關スル事項若ハ數事項ヲ專攻セン

一、入學者ノ爲ニ專攻科ヲ置クコトヲ得

第十四條 專攻科ノ修業年限ハ二ケ年以内トス

第十五條 水産學校ニハ遠洋漁業ニ従事スル者ヲ養成スル爲ニ遠洋漁業科ヲ置クコトヲ得

第十六條 水産學校ニハ土地ノ情况ニ依リ遠洋漁業科ノミヲ置クコトヲ得

第十七條 遠洋漁業科ノ修業年限ハ三ケ年以内トス

第十八條 遠洋漁業科ノ學科目ハ航海術、運用術、漁撈論造船學大意、氣象及海洋學、數學外國語、法規及實習トス

前項ノ學科目ハ便宜之ヲ加除スルコトヲ得

第十九條 遠洋漁業科ニ入學スル者ノ資格ハ本科ニ於テ三ケ年以上漁撈ニ關スル學科ヲ修メタル者又ハ之ト同等以上トス

第二十條 土地ノ情况ニ依リ水産學校ノ學科ト商船學校其ノ他ノ實業學校ノ學科トヲ併置スルコトヲ得

第二十一條 水産學校ノ規則中ニ規定スヘキ事項凡左ノ如シ

一、學科ノ目的

二、修業年限ニ關スル事項

三、教授日數ニ關スル事項

四、休業日ニ關スル事項

五、學科目及其ノ程度ニ關スル事項

六、各學科目毎週教授時數ニ關スル事項

七、入學退學ニ關スル事項

八、試驗ニ關スル事項

九、賞罰ニ關スル事項

十、授業料等ニ關スル事項

十一、寄宿舎ニ關スル事項

十二、水産學校ニ於テハ學科目教授時數及學級數ニ應シ相當ノ教員ヲ置クヘシ

二十三條 水産學校ニ於テハ相當ノ教授用及參考用圖書、器具、機械、標本、模型並ニ實習用諸機械等ヲ備フヘシ

附 則

第二十五條 本令ハ明治三十五年四月一日ヨリ施行ス

第二十六條 本令施行ノ際明治三十三年文部省令第九號ニ依リ設置シタル水産學校